の着座を見屆け一旦クツロギて後常座に立ちて名宣る、鎌倉武士の勇氣ある勿論なれども、囚人に同情を寄せる慈心ある人、而も曲柄の關係もあれば、強き内にも何となくシツトリと。

是れは鎌倉殿の御内に、狩野介宗茂にて候……

ワキは名宣り終りて笛座の上に着座す。次第にてシテ出る、シテは小面、孫次郎、增など若き女の面、鬘、同帶、箔の着付、唐織の着流し、舞臺に入り常坐に立ち大小の方へ向ひ、靜に次第を謠ふ。

琴の音添へて音信るゝ〳〵、是やあづまやなるらん

地取りに正面へ直し、靜に美しく哀を含みて謠ふ。

夫春の花の樹頭に榮え……

下歌は抑へてダレぬ樣、上歌は張りてコケぬ樣、定規の抑揚を付けて靜かに艶しく謠ひ進み、「けふの夕」と右を受け、上歌終りて、ワキの方へ向ひ案内を乞ふ。

いかに案内申候はん

ワキは案内を聞くと共に立ち、出向へて答へ、「御機嫌を以て申さうずるにて候」と謠ひて一旦坐に着き、シテも後見坐にクツログ。ツレは腰掛けしまゝ、靜かに物哀れに謠ふ、但し何となく勇氣の内に籠る心は忘られず。

身は是樣花一日の榮……

ツレの謠の終らんとする頃、ワキは立ちてツレの前へ行きて下に居り、シテも出て常坐に立つ、ワキはツレに向ひ千手の來りしことを傳へ、ツレの對面は叶はぬといふを聞て是れをシテに傳へ、シテより賴朝の命によりて來れる由を聞て更にツレへ傳ふる等の手續きは普通の通りにて「よし〳〵御憚は」と謠ひながら立ち「唯此方へ」とシテの方へ向ひ廻りて元の坐へ着く、シテはツレの謠を受け、さもいそ〳〵とせる心持にて優美に謠ふ。

其時千手立寄りて

千手

地は隙さず受け、氣を掛け麗はしく謠ふ。

妻戸をきりゝと押開く……

此地謠に伴れシテは扇を開きて立寄り妻戸を開く形をなし重衡へ向ひ常の座に行き下に居る、形として簡單なれども、無量の情愛の籠る所にて、優美に其風情を顯すは地謠とシテの力にあり、注意すべき見所聞所なり、恥かしながら見えんと居合ひし謠は爰にて氣を換へ、實や東の果しまで以下シッポリと謠ふ。

ツレはシテに向ひ嚴かに。

いかに千手の前……

シテは恭ひて。

さん候其由申て候へば……

「思ひもよらずとこそ候ひつれ」とシックリと抑へ置きさも切なき心入れにてシッポリと。

わらはも御心の内推はかり參らせて……

ツレはさも殘念なる思入にて。

口惜しや我一の谷にていかにもなるべき身の生捕られ……

シテは慰め顏に氣を引立て。

げに〳〵これは御理りさりながら……

ツレも幾干か引立てられて。

げによく慰み給へども……

互ひに靜かに謠ひ進みてシックリと地へ渡し地は靜かに受けて物哀れに美しく謠ふ。

思へたゞ世は空蟬の唐衣……

澁りし座敷を引立んとワキは威ひよく優美に。

けふの雨中の夕の空……

謠ひながら扇を開き立ち、扇に手を添へて酒樽を持出したる振りをし、「御酌に立

ち」とツレの前へ行き坐す、シテも之れに促され機轉をきかし興を引立つる心持にて。
千手も此よし見るよりも……
扇を開き「御酌に立ち」と重衡の前へ進みて行く。ツレも自然と引立られし心持にて。
今は何時しか憚りの……
ワキは更に煽動する心持にて勇ましく。
夫々いかに何にても……
シテは隙さず「其時千手取りあへず」と麗はしく謠ひ詰め、更に氣を換へ、引立ち伸々と朗詠を吟ずる心持にて美しく謠ふ。
羅綺の重衣たる情なき事を機婦に妬む……
三人思ひ合ひて靜かに。
只今詠じ給ふ朗詠は……

ツレはシツポリと。
さりながら重衡は今生の望なし
三人もシツポリと。
たゞ來世の便こそ聞まほしけれと宣へば
シテも前を受けて靜かに。
わらは仰せを承り
爰に氣を換へ引立ちて伸びやかに。
十惡といふとも引攝すと
地も引續きて伸々と麗はしく。
朗詠してぞかなでける
爰にてイロエとなりシテは立つて舞臺を一周して中央に立ち仕止め、是れよりクセ舞に入る段取りとなり、靜かに伸々とクリを謠ふ。

さても重衡は……

筋より言へば此のイロエと序の舞は聯絡したるものにて、千手は重衡の愁ひを慰めん爲め歌ひ且つ舞ひて興を催さんと計り、遂に其れに誘れて重衡も琴を彈ずることゝなるなれば、「朗詠してぞ奏でける」にて舞となり其れより直に「一樹の蔭や一河の流れ」と移つて良い順序なれど、能には「クセ舞」の加るが本體なりといふ關係より、此に別段に重衡の生立より囚れの身となり鎌倉へ送らるゝ迄の事を叙することゝしたれば、暫く其筋の運びは中段せらるゝことゝなる、其心して見ざれば、此のクリ、サシ、クセの意味は甚だ解せられざることゝなり行くなり。

クリの大きく引立ち、サシのサラリと抑へられ、シツポリとクセに移り、序破急の順序を踏んでクセ舞を終るは普通の通りなるが、二段曲なれば、其の分界も明かにてシテの上げにて各段落をなすこと勿論なり、此曲は今にも斷頭場裡の露と消ゆべき囚人の憂さを語るものなれば、沈み勝ちに澁めやかなる本體なれど、此の「クセ」の内には道行らしき文句なども交り居り、何となく浮きやかにて、穴勝に沈靜せるのみにあらざるなり。

クセ舞の形は大體に於て定まれるものなれど、所により文句に合せての形ありて各曲一樣ならず、此クセ亦よし力なしとツレを見、ともし火闇うしてと扇にて面を被ひ夜の空と上を見るなどの形あり、序の舞終り上羽左右等常の通りにて、ツレの謠の時シテはクツロギ、ツレは靜かながら憂を忘れし心持にて「其時重衡興に乘じ」と謠ひ、返しに扇を開き左へ持ちて琵琶を彈する樣を示す時シテは出てツレの前へ行きて下に居り扇を開き左の手へ持ち、ツレと相對して、「合せて聞けば」と謠ひ、「峰の松風」と上を見、「通ひ來にけり」と扇を見、「琴を枕」と扇を頭に當て、「ほの〳〵と」と扇を右へ收り立てかざして上を見、「淺間にやなりぬべき」とツレに向ひ下に居てシホル迄曲中第一の景情兼備る形所にて大いに注目すべき所なり、「斯くて重衡勅により」とワキの重衡へ向ふと共に局面一變し、促し立てられてツレは立ちて橋掛りへと赴く此所

の謠は武士の四人を警護して行く樣なれば引立ちて強く、シテの「千手は泣く〳〵」よりシッポリと靜りシテは泣きながら立ちて見送り深き愁歎の別れとなりて局を結ぶ、松風琴聲に和して尙憐れを傳ふるものゝ如し。

三井寺

シテ……狂女　子方　千滿丸
ワキ……僧　處……近江

名所の月と鐘を種として、母の子を慕ふ情を叙せる曲、狂女物の內最も風景に富めるものを求めば、誰人も先づ此の曲を指すべし、前半清水寺に祈念の場は、本より正氣なればシックリと靜に後の出は先づ風景より始めて子を尋る親の心情を吐露し、京都より三井寺迄の道行をサラリと謠ひ、三井寺庭上の場は、遙かに湖水を眺めたる叙景にて大きく幽かに、寺の名物なる鐘を捕へての鐘の段は波瀾多く、更に鐘に付ての緣語にて綴られたる一節は曲舞となりて靜かに、親子再會に歡喜の情を漲らしてサラリと局を結ぶ、景情並び備りて而も變化に富む、形としては手少なけれども、總體に於て風情に富み、文章も麗はしく、謠つて心地よく、狂女ものゝ代表として重ぜらるゝこと偶然にあらざるなり。

囃子方着座後シテ面曲見、鬘、同帶、箔の着付、厚板の着流し、中老の女の裝にて手に水晶の珠數を持ち出舞臺の正面先三尺程を明けたる所に坐し、正面に向ひ合掌し、祈念の心持にて靜に謠ふ。

無南や大慈大悲の觀世音さしも草、さしもかしこき誓の末、一稱一念なほ賴みあり

爰にて合掌を止め、靜かに謠ひ進み、シッポリと下歌に移る。

憐み給へ思ひ子の、行末何となりぬらん

行末とシホリ、打切にて氣を換へ上歌を謠ふ、此の上歌は睡眠中御夢想の心を謠はしむるものなれば其心持を以て幽かに謠ふべきなり、夢想を其人に謠はしむるなどい

ふことは、能樂獨得の妙味にて雅興極りなし。

枯れたる木にだにも……

夢覺めたる心持にてあらあり難やと謠ひかけ、立ちて歸らんとする所へ、門前の者來かゝり夢を占ふことあり、三井寺へ行けば我子に巡り遭はるゝといふので告げに任せて三井寺とやらんへ參り候べしと中入となる、此の間狂言との對話の間腰桶へ掛るは、占者の店に憩ふ樣にて、若し芝居で此場を演じたらば、清水門前の背景に、緋毛氈を掛けたる床儿を並べ、賣卜者の店付の體にて總髪に十德を着たる占者は、床儿に掛かゝれる年增の女に對し夢判斷を語るといふ場となるのである。

中入となり先づ鐘樓の作り物を見付柱の所へ出し、次第の拍子に伴れ、子方を先に立て、僧ワキ三人出で、舞臺に入り向合ひ、強く次第を謠ふ。

秋も半の暮待て、〳〵、月に心や急ぐらん

地取りにワキは正面を受け名宣ること例の如く、勢ひよく道行を謠ふ。

類ひなき名を望月の今宵とて……

一聲狂女越しありて、箔腰卷、腰帶、水衣肩上げ、扇をさし、手に笹を持ちたるシテ出、橋掛りに立ち、サラリと麗はしく謠ふ。

雪ならば幾度袖を拂はまし……

鴉てると開き見、今目前と拜み、あの鳥類と右を見るなど、文句によりての仕形あり、子の行方をもと開き、亂れ心より舞臺へ入りカケリとなる、カケリは狂女の風情を示せる一種の舞働きにて、二段あり、段毎に緩急あり、始は靜にして後は急となる、拍子と擧動は一致して活氣あり面白きものなり。

都の秋と謠ひながら出、地謠の月見ぬと謠ふに伴れて足拍子を蹈み、其れより文句に合せて仕形あり、さらりと麗はしき謠に伴れて道行をまひ三井寺に着にけりと太鼓座の前に止る。

ワキは立ちてシツトリと木蔭に休らひ名月に眺め入りたる樣を謠ふ時、シテシテ柱

三井寺

の前の常座に立ち、月に心も澄み渡れる樣に靜に美しく謠ふ。

實に〳〵今宵は三五夜中の新月の色二千里の外の故人の心

爰にて氣を換へ、折にふれ思ひ出で古歌を吟ずる心持にて。

水の面に照る月なみを數ふれば秋も最中夜も半

更に氣を轉じ引立ちて麗はしく、シットリと地へ渡す。

所がらさへ面白や

地はシックリ受けて湖水遠望の實景を靜に謠ふ。

月は山風そ時雨に鳴の海……

打切前に据拍子を踏み、返しより右へ受けて出、ます見と開きて見、山田と指して出で角とり廻り、月のと月を見、舟もと左へ乘り拍子を踏みながら笹へ手を掛け、返しに橋掛りへ行く迄總て文句に合せ餘情深き仕形をし、月夜に湖水遠望の實景を觀者の前に顯せしは、鐘の段を積極の見所聞所とせば爰は正しく消極の見所聞所ならんか、

（爰にて狂言方の鐘つき坊主出で來り鐘をつくことを演ず）、シテは橋掛りにて之れに聞耳立て、狂言方の方を見込み、スラ〳〵と進み來りて笹にて狂言方を打ち、狂言方とセリフの後、狂言方はワキに狂女が鐘を撞かうといふ由を報告して退く、シテは狂言の退きし後鐘を見て面白の鐘の音やな、と謠ひ、是はさゞ波やと正面を受けて口吟し、誠やと又鐘を見、妾もとよせいをかけ、次第にて出で開き、地取りにてクツロギ笹を捨て、扇を持ち、鐘をつかんずる勢ひを示して作り物の方へ進み行を見て、ワキは呼止むる、シテワキの問答常の通り、狂女なれどとワキを拜み、許し給へやと足拍子より掛りて鐘の段となる、鐘の段は一曲中最も波瀾多き謠所にて、シテはシツクリ、地は突込みてハコビ能く謠ふ内にもコケズ障らず謠ひ進むにつれ、シテは鐘に附きたる美しく長き紐を持ち、足拍子面白く鐘の鳴る形容しての立廻りは最も見るべく聞くべき所、つまり百八と鐘をつく形もあり、詠め居りて明さんと常座の所にて下に居るまで曲中第一の見所聞所なり。

クリサシは形として何事もなけれども鐘の段とは最も趣を異にし、謠は靜まりてシッポリとなる。

クセは一段と沈着て序破急は鐘の叙事變化と共に變化す、先づ山寺の出は序中の序にて、其外曉と破に移り、亦待宵と急となれど、急といふて早くなるにもあらず、其内にも亦序破急の變化なき能はず、是等の心持ち謠分けは筆紙の能く盡すべきにあらず、能く師に就て學ぶべきなり、亦は老らくと又意を更へ、今思ひねと悲しむ心持のある丈け沈み、此鐘のつく〳〵と鐘を見る形ある丈け心を持ち、前のつくを突込み、返しをシックリと謠ひ趣を添ふること大切の謠場所なり、爰よりシテは立ちて仕留め上羽となる。

上羽よりは普通の曲舞に大差なけれども、文句柄の風情に關係多き丈け自然形にも餘情籠り、月と鐘とに心を止めてクセを終る。

子方の詞よりシテ、ワキ、ワキツレ、子方、との掛合は其の文句により心持あり、シテの我子の聲と聞知りて問掛ける所は心も空とあこがるゝ趣を見せ、ワキツレの遮る所には斷然と叱り付くる氣込を要し、子方のあら悲しやは抑へ切れずに思はず發する意氣を要し、ワキのはや色に出で給ひて候は最早詮なしとあきらめて同情を籠め、双方の名乘りとなりては、既に氣は鎮りて、何となく哀れを含み各々其心持を謠ふことあり、麗はしくロンギとなる、次第に詰みし呼吸は嬉しき鐘の聲かなと一段落を告げ、氣を轉じながら障らずハコビ能く謠ひ進み、勇ましく、實にあり難き孝行のとめで度終局す。

熊阪

前シテ……僧　後シテ……長範ノ靈
ワキ……旅僧　處……美濃

熊阪長範といふ盜賊の昔を語らしめたる一種の切能なれ共、略式の脇能に用る

こともあれば、準修羅として二番目に使ふこともあり、是れ此作の神男女狂鬼に宛て適らざる一種異樣の作たる確證なり其の筋を探れば盜賊の失敗談に過ぎざれども、之れを佛者に近寄らしめて罪障懺悔の意を見せしと、其の場の風景を捕へて松を背景たらしめしとにより全く此の曲を美化し、毫も殘忍殺伐の氣を生せしめざるは作者の手腕の認むべき所にして實に謠曲の特長なり、雄壯の内に物淋しき氣あり、物淋しき内に可憐と優美なる趣きを含めるが此の曲の要點ならんか。

囃子方の打つ次第に伴れ、熨斗目、水衣、角帽子の旅僧に扮せるワキ一人出で、舞臺に入り、重くれずシッポリと次第を謠ふ。

憂しとは言ひて捨つる身の、く、行衞やいつと定むらん

地取りに正面へ直し例の如く名乘り道行を謠ひ、ワキ座へと進み行く所を遥かに幕の内より呼び掛けてシテ出づる、此のシテも熨斗目、水衣、角帽子の僧形にて、水衣の色など黑くクスンで華やかならぬを用ゐるがよし、從つて謠も初發心の僧丈けに重くれずサラリの中に、何となく物々しげなる趣きを含み、尋常の僧にあらずと思はしむる所が無くてはならず。

のうくあれなる御僧に申すべき事の候へ

此方の事にて候か何事にて候ぞ

意外の出來事なれども、ワキは何氣なくサラリと。

シテは歩みながら何氣なく。

今日は去る者の命日にて候吊ひて賜り候へ

ワキはいさゝか不審を起したれども未だ別段心にもさへず。

其こそ出家の望なれ去ながら、誰と志して回向申すべき

シテは心に期す所あれども未だ色に出さず、何氣なき體にて、其の古墳の方をさし示しながら頼む。

たとひ其名は申さずとも、あれに見えたる一木の松の、少し此方の茅原こそ、唯今申す古墳なれ、往復なら

れば申すなり

ワキは愈々不審の眉をひそめて問ふ。

あら何ともなや、誰と名を知らで回向は如何ならん

シテはどこまでも平氣を裝ひ、經文を引いて其の儘に回向せしめんとす、其の圖々しき所に強賊の本性を示す、されども未だ其の本性を顯すものならねば、謡は平氣にサラリとなり、

よし其れとても苦しからず、法界衆生平等利益

ワキは何時しか、其の術中に引き入れられ、之れに和して、サラリと。

出離生死を

シテ亦之れを受けて、シットリと地へ渡す。

離れよとの

地はシックリと受けて、サラリと騒がしからず。

御吊ひを身に受けば、く、たとひ其名は名のらずとも……

返しよりシテは前へ出でて開き右廻りなど、例の趣きを添ふる立廻りありて、ワキへ對し。

さらば此方へ御入り候へ、愚僧が庵室の候に一夜を明かして御遣り候へ

此の詞のなき流義にては前の地謡の内に庵室へ案内されしものとなり、ワキはワキ坐へ、シテは大小前へ坐す。

ワキは既に回向を承諾し、唯々諾々と庵室へ入る。

さらばこう參らうずるにて候

爰にてワキはワキ坐へ、シテは大小前の常坐へ坐す、ワキは此の庵室内の樣の愈々不審しきに驚きて更に問を發す。

いかに申候、持佛堂に參り勤を始うずると存候所に……

シテは其の申開きの爲めに、昔の盜賊時代の事を餘所事として語り、暗に罪障懺悔

をなさんとす、滯らぬ樣にサラリと語るべきなれども、何となく其の内に、我身に思ひある趣きを示すこと肝要なり。

さん候、此僧は未だ初發心の者にて候、御覽候如く此巻りは……

何となく尋常ならぬ模樣を見せてボウと地へ渡し、地もボンヤリと靜に受けて滯らぬ樣に謠ふ。

ししようなき手柄、似あはぬ僧の腕立て、さこそをかしと思すらめ……

此所一種のクセなれば、クセに付ての心持常の如く、上げより引立つこと勿論なれども、何となく此の僧の語る所の裏には物の潜める如き感の離れぬが此謠に就ての心得なり。

打切にて更に氣を換へ夜の更くると共に此のシテの愈々尋常人にあらざる樣も見えて、シツポリと。

かやうの物語、申さば夜も明けなまし、お休みあれやお僧達……

我もまどろまんさらばと、とワキへ向ひて起ち茫々たる内に夢の如く煙りの如く中入となる。

中入の間に間狂言の所の者出で來り、熊阪長範の故事を語ること例の如く、夢中にあるワキは、扨は愈々熊阪の長範の亡靈なりと悟りて、其の爲めに吊ひを爲すこととなるも、尙夢中の人たることは免かれず、例の如く茫漠たる趣きを以て待謠をうたふ。

一夜ふす男鹿の角の束の間も……

出羽の拍子に伴れて、長靈癒見、長範頭巾、厚板、法被、半切にて長刀を被ぎシテ出づる、今度は愈々本體を顯して、其の昔を語るものなれば、謠にも心持にも表裏なし、ドッシリと丈夫に太く橋掛にて謠ふ。

東南に風立つて西北に雲靜ならず

氣を換へノリて。

夕やみの夜風烈しき山蔭に
地は隙さず受け威ひよく大きくサラリと。
椙木の間やさわぐらん
シテも氣を抜かさず地におつかぶせて太く丈夫に。
有明頃かいつしかに
太鼓の頭を聞きノリて垂れぬ樣威ひよく。
月は出でも朧夜なるべし、切入責よと前後を下知し……
月はと東の方を見て月を示し、切入れと長刀をかい込み、弓手や右手と左右にさし分け心付をして舞臺へ入り右を受け更にワキの方へ向ひて長刀を肩にかけて立つ、此邊りは熊阪長範の其人の勇々しき面影を示す所にて大切なる形所なり、ワキは之れを見て隙さず氣を掛けサラリと。
熊阪の長範にてましますかや、其時の有樣御物語候へ

シテは太く丈夫に謡ひながら大小前へ行き腰桶にかゝる。
扨も三條の吉次信高とて……
是れよりシテワキの掛合となり問答體に謡ふ所は、此謡中大切の謡所にて、此の謡によりて此の時の模樣の想像せらるゝなり、シテはドッシリと太く、ワキは突掛けてサラリと謡ひ、次第に呼吸を詰めて威ひよく地へ渡し、地は隙さず受け、シッカリと威ひよく謡ふ。
いふこそ程も久しけれ……
右其夜奮戰の樣を語る所は頗る長文句にて、餘り始より突掛る時は、呼吸續かずして、中途より挫折する恐あり、さりとて大事を取れば威ひを損じて引立たず、地謡として深く注意を要する大事の謡場なり、又シテとしても、長刀捌きといひ體の働きといひ最も注意すべき大事の形所なり。
太鼓の打出となり頭を聞き氣を換へノリて謡へども、氣が緩んでは垂れてならず、

其の變化ありて氣の拔けざる注意肝要なり。

打物業にて叶ふまじ……

是れより長刀を捨て、手を廣げて捕んとする體のみの働きとなる、是れ此の謠方に一大變化を與へたる所以にて、力及ばず次第に弱る趣きを見せる爲めに、吟に强弱あり、謠方に緩急あり、頗る大切の謠所なり。

次第々々に重手は負ひぬ……

太鼓の頭ありて一段落を付くれども、餘りガクリと靜りては氣が拔けてならず、其度合こそ肝腎なり、「弱り行て」と愈々靜り、シテは氣を換へ篤と靜りて浮きやかに。

此の松が根の

物語り全く終り、强賊たりし熊阪の長範は懺悔によりて罪障も消滅し、殺伐の氣も去り、松吹く風と共に消え失する場合となりたるものなれば、此所より氣をスッカリと換り、地は輕く出て靜かにシッポリと優美に曲を結ぶ。

玉井

シテ……豐玉姫　ツレ……玉依姫　後シテ……老龍

ワキ……炎出見尊　ツレ……從者　處……龍宮

彦炎出見の皇、兄君の釣針を借て釣に出で其釣針を魚に取られ、我が劔を崩して釣針として還し給へども、兄の皇は聞入れ給はず、已を得ず海邊に行きて彷徨ひ給ひしが、鹽土翁の敎に任せ龍宮に赴き、元の釣針は勿論數々の寶と共に豐玉、玉依二人の姫を得て歸り給ひしといふ神話に基きて作られし曲なり。

神事能は祝言の曲として重く用ゐられしものなることは貳百番の能中殆ど四分の一を占め居れるにても知らるゝ所なるが、近時は謠の流行盛んなるに拘らず此の種の謠の敬遠せられあるは何の爲めなるべきか、其の事柄の神秘的にして情趣に乏しきが當今の人情と副はざる關係もあるべしと雖も、一つには當今の謠の流

行の浮氣にして未だ能く能樂の趣味の解せられざるにも由らずんばあらず。

能樂は元高尚優美なるべきものにして莊重高雅の趣きは最も神事能に於て發揮さる、されば神事能の用ゐらるゝは能樂趣味の健全に擴がれる證にして、個樣の趣味の遠けられ、戀慕、哀傷等の曲の近づけらるゝは、柔軟の氣風の瀰漫せるものにして大に警戒を要する傾向なりと言はざる可からず。

强吟は古來我國にては祝言の音聲として尊ばるゝ所なれども、西洋音樂にては未だ之れを使用することを知らずといふ、されば强吟は我國特有の樂音ともいふべきものにて、謠曲家の最も誇りとして研究すべき所ならん。而して神事能は强吟の多く用ゐらるゝ曲にして、高尚莊重なる趣味は此の曲に於て最も味ふを得べし。

玉井は神事能中積極的に擴張されし一曲にして莊重雄大の内に優雅の趣を添へたり、能樂をして愈々健全に發達せしめんとするには斯の如き類の謠の流行を期せざるべからず。

囃子方着坐後、もちの木を丸き臺輪に附けたるものと井筒の作り物とを舞臺正面の左右へ出し、最も嚴肅なる置鼓にてワキ出づる、ワキは唐冠、色鉢卷、厚板、狩衣、大口、腰帶、扇にてツレは普通大臣の通り折烏帽子、狩衣、大口なり、ワキ一人小鼓の手に伴れて舞臺に入り、ツレは橋掛り一の松の邊に坐して待つ。

ワキは一定の鼓の手に合せてシテ柱の前に坐して禮をなし、左右の狩衣の露を取り手を胸の邊迄上げて下し、同じく鼓の聲に合せながら目付柱の方を向きながら立ち、鼓の頭に付きて露を下し狩衣捌をして正面へ出で、鼓に合せて足の差引あり、鼓止りて後最も品位よく悠々と謠ひ出す。

夫れ天地開け初りしより、天神七代地神四代に至り、火々出見の尊とは我事なり

氣を換へ位を持ながらスカリと。

扨も兄ほのすそりの尊の釣針を……

更に氣を換へ悠々と。

廣原海のそこともしらぬ鹽土翁の

翁の敎へより一足引きて更に前へ進み、橋掛りより進み來る脇連と相對して道行に

かゝる、脇能の常とて强きこと勿論なれど高砂の如く烈しからず品位を持して。

直成道を行くごとく〳〵、濵路遙かに隔來て……

詞となりては滯らぬ樣スカリながら鷹揚に。

扨も我鹽土翁の翁の敎へに隨ひて……

瓦を敷ける光門と見付柱の上の方を見、玉の井ありと井筒を見、桂の木ありと左の

もちの木の方を見、木のもとに立寄りてワキ坐の方へ悠々と進み謠ひ終つて後坐して

待つ、ワキとしては大に注意すべき見所なり。

異の一聲にてシテ及ツレ出て橋掛にて向合ふこと總て加茂に異なることなし、シテ

面增、鬘、同帶、箔唐織着流し、水桶を持つ、ツレ面小面、他はシテと同じ、但し何

も持たず靜め頭にて篤と鎭りし位に隨ひ、最も靜かにシックリと謠ひ出す、霞の內よ

り仙女の妙音を聞く思ひあらしむべし。

量なき齡を延る明暮の……

ツレは二の句の鼓の手を聞き濟して、サラリと氣を換へ正面へ向ひて。

暫む業も手づさみに……

向合ひながらシックリと。

むすぶも淸き水ならん

アシラヒに伴れてツレを先に立てゝ舞臺に入りツレは大小前、シテはシテ柱前に立

ち、氣を換へ靜かながらサラリと。

濁りなき心の水の泉まで、老せぬ齡を汲て知る

向合ひながら思ひ合ひて滯らず。

樂の水の故なれや……

下歌はシックリと上歌は晴れやかに品位よく靜に謠ひ打切の後の朝夕なるゝより入り替りシテは大小前に立つ、ワキは謠の返しより立ちてシテに向ひ鷹揚に。

我玉の井の邊りにたゝずむ所に……

其樣けだかきとシテッレを見、是成木影と一足踏み出し正面を向き、身を隱しつゝたゝずみたりと謠ふ。是れより問答常の如く文句に合せて心付あり、シテは靜かに、ワキは位を持ちながらサラリと謠ひ進みシックリと地へ渡す、地は蹠さず受けて麗はしく引立ちて謠ふ。

互ひに連枝の名乘して……

互ひにと右に請け、つゝましとワキへ向き、早打とけてと開き、神にぞと左廻り、引手あまたとワキに向ひ開きセリフありて下に居り、威ひよく大きくクリに掛る。

かたじけなくも天の御神の御孫……

サシ、クセ常の如く勇ましく威ひよく謠ひ進みクセ終ると共にワキはシテに向ひて。

かくて三歲も過ぬれば……

シテはワキに對しシックリと。

御心易く思し召せ……

シックリと地へ渡し地もシックリと受けて太く次第に靜めてシックリと來序に移り中入となる。

中入中龍宮の使の者出でて能の略筋をシャベル事あり、出羽にて天女二人出て盆に珠を戴せ持ち橋掛りにて向合ひ勇ましく中の位にて謠ふ。

光散る鹽みつ珠のおのづから……

太鼓の頭にて位を定め勇ましく中の位に地を謠ふ。

各珠を捧げつゝ……

返しより舞臺に入り二人共に囃子方の前へ並び「彼の釣針を待ち給ふ」と橋掛りの方を見込むと共に地謠も靜りドッシリと大ベシに移る。

静かにドッシリと締りたる大ベシの拍子に伴れ、白頭、色鉢巻、鼻瘤悪尉面、龍臺を頂き、厚板、半切、法被、腰帯の裝ひに撞木杖を突き、釣針に釣糸を付けしを左に持ち、悠々と出で橋掛りに立ち、堂々と太く謡ふ。

客人の君の命に従ひ……

打上げの頭にて位を定め、天女の位に戻り中の位にて。

鹽満鹽干二つの玉を……

シテは舞臺に入りワキの前へ行き釣針を置き、再び橋掛りへ歸り腰掛けて居ると、天女二人はシテと共にワキの所へ行きて玉を置き、立ち右へ廻りながら扇を抜き持ち長絹の露を取り達拜して二人共に天女の舞にかゝる、舞濟み例の通り左右、返しより角へ行き左廻り左右打込開きて止めて笛座の上へ坐す、打返しの頭で篤と鎮め、シテはシットリと謡ふ。

富原海の宮主

床几にかゝり謡ひながら拍子を蹈み、舞働にかゝる、老龍といふ關係より舞働も静かにシットリと舞ふ。

舞働終り姿は老龍と少し出で開き、唐杖にすがりと左の手を杖にかけ左右に返すと袖を返しあしらひ開き、足ぶみと足拍子を蹈むなど、尤も鷹揚なる形を見せ、ワキの御座を立ち給へばと立つを見て進み行き左り手にて袖をとり、わたつみと後へシザリ下に居てワキを拜し、五丈の鰐にとワキは乘る仕形をし天女二人も珠を持ち橋掛りへ行く後を廻りて角へ出、浪を拂ひ潮を蹴立てと蹴上る仕形をし左へ廻りワキを送る心持にて右へ廻り開き留拍子となる。

後半は大ベシに白頭の老龍、十分なる位を持しドッシリと舞ひ納むる内に天女の華やかなる舞も交り、壯大華麗相俟つて最も趣きある能納なり。

敦盛

前シテ……草刈男　ツレ……同　上　後シテ……敦盛靈
ワキ……蓮生坊　處……攝　津

修羅物中貴公子の可憐なる趣き經政と相對比すべきもの、配するに生前愛翫の樂器を以てせるも能く相似たり、其異なる點を擧ぐれば、彼れは初めより正體を顯し、最後に修羅の苦患を示してカケリとなり、是れは初めに草刈となりて再び正體を顯し、修羅の苦患を見せずして男舞をまふ。修羅物中にて舞あるは唯此の敦盛のみ、是れ他に異なる一大特例なり、全曲の材料文字總て可憐を以て充たさる、可憐といふことこそ實に全篇の骨子ならめ。

囃子方坐定りて次第を打ち、之れに連れて熨斗目、水衣、角帽子のワキ僧一人出で舞臺に入り次第をうたふ、雲水行脚の僧なれ共、本は熊谷の次郎直實と名乘りし武士の果、過ぎし年我手に掛けし公達の亡き跡を吊はん爲め、古戰場須磨の浦へと志すもの、內に籠る感慨の深きこと察すべきなり、其心して謠ふべし。

夢の世なれば驚きて……

地取りにて正面へ直して名乘る。明に我が俗體なりし時の名迄も露す、尋常の行脚僧と同じからざる勿論なり。

是は武藏國の住人……

道行となりては、都より須磨迄行程のあらましを謠ふのみ、唯一個の行脚僧の心持のみ。

九重の雲井を出でて行月の……

須磨浦に着きて後、古を思ひ感慨を漏す詞は流義により差異あり、何れにしても懷舊の情に堪へざるの趣きあるべし。

急ぎ候程に津の國一の谷に着て候……

笛の音を聞きて人あるを知れ共、未だ我が志す人の亡靈なるを知らず、然れ共觀客をして、將に出で來らんとする人の、唯尋常の草刈にあらざるを想はしむる丈けの用意はあるべし。

又あの上野に當つて笛の音の聞え候……

ワキは脇坐に息ひ、囃子方は更に次第を打ち草刈男に扮したるシテ及び連二人より五人迄出づる、シテ、ツレ共に面ナシ、段熨斗目に水衣の肩を取り、刈草を擔ぐ、大口を穿く事もあり、シテ計り大口を穿きツレは穿かざるもあり、腰帶、扇、常の如し素袍上下の事もありといふ、舞臺に入り向合ひて次第を無邪氣にかはゆらしくうたふ。

草刈笛の聲遥へて……

地取りにシテのみ正面向きサラリと可愛らしくサシを謠ひ、連吟より向き合ひ、下歌上歌常の如く、謠の終りにシテ常の坐に行きて草を肩より下し、ツレは地謠の前へ並ぶ。

彼の岡に草刈るなのこ野を分けて……

ワキは居ながらシテに向ひ問ひシテはワキの方に向ひて答ふ。

如何に是れなる草刈達……

ツレはワキの方に向ひて極めサラリとうたふ。

草刈の笛樵の歌は……

ワキは相變らずシテに向ひたる儘にて氣を抜かさず、シテ亦之れに應じて互に謠ひ進みて地へ渡す、ワキは丈夫に謠へども位取らず、シテはサラリと可愛らしく謠へども位を失はず、此の兼合ひこそ双方調和の面白き所なり。

實に〳〵是は理りなり……

地は隙さず受け流暢に滯らざる樣うたふ。

身の業はすける心により竹の……

シテ此の地謠につれて先づ開きて足拍子あり、小枝せみ折より出て開き、青葉の笛

とワキの方へ向き、住吉より左り廻り、あまのと開きてワキへ向ひ坐し草を捨て扇を持つ、ツレは住吉より順次上席の者より樂屋へ入る。

次の問答別段の事なし、次第はたゞならぬ趣きを見せ、名乘りもあへず消え失せる丈けの心持を要す、「ゆかりの者にて候なり」の詞など幾干の心入あるべし、ワキ掌を合せて拜するにつれ、シテも亦手を合す、「捨てさせ給ふなよ」にて手を下し、「申さず」より立ち、「向ひて」とワキを卷きさし出て開き右へ廻り、「かき消す」と開き中入となる。

此の前半取り立てゝ言ふ程の事なけれ共、須磨の古戰場、草刈、笛の音、弔ふ人は由緣りある蓮生坊、弔はるゝ人は若葉萠え出でんとして刈り取られし貴公子、可憐の内の雅致掬すべし愛すべし。

中入中所の者出て敦盛の事青葉の笛の事など語る、蓮生坊を前に置ての物語りは肩の張る心地ぞせらる。

待謠例の如く囃子方一聲を打ち、十六と稱する稚氣ある貴公子の面（小面、孫次郎など女の面を用ることもあり）に黑垂れ、梨子打、白鉢卷、箔の着付、大口、長絹の肩脫ぎ、腰帶をし、太刀をはき、扇を持ちてシテ出て、舞臺に入り、靜かに滯らざる樣和歌を謠ふ。

淡路潟、かよふ千鳥の聲聞けば……

氣を換へ引立ちワキに向ひ流暢に謠ふ。

いかに蓮生、敦盛こそ參りて候へ

ワキは隙さず氣を掛けて。

不思議やな愚鈍ならし……

キッパリ威ひある內にも可憐の趣きを捨てず。

何しに夢にてあるべきぞ……

シテ、ワキ位の兼合以前の如く、互ひに呼吸を扱かさず、謠ひ進みてキッパリと地

へ渡し、地は隙さず受け取り引立ちサラリと謠ふ。

是かや悪人の友をふり捨てゝ……

善人とワキの方へ向き御身と開き有がたしと角へ出て左へ開き廻り、夜すがらとワキに向き開き返しに床儿に掛るなどの形あり。

上掛りにはクリ地ありて下掛りにはなし、在つて本より可然所、省きしは物柄の輕きに就ての斟酌なるべし、在る方なれば滯らざる樣引立ちて。

夫れ春の花の樹頭に上るは……

サラリとサシを謠ふ。

然るに一門かどを並べ……

以下サシ常の通り留めの所にてはワキへアシラフもあり亦扇をつかふもあり。

クセ、サラリと可愛らしくうたふ。

然るに平家世を取つて二十餘年……

四方の嵐といふ所より立ちてクセを舞ふ、文句に合せ通常と大差なし、波にしほるゝ磯枕と扇を左へ取り頭に當てゝ枕に響かす形あり、立つるや薄煙りと煙を見やり、折敷てと扇を折り返し、一門の果とシホリて止めるなど、少しく常に異なりて見るべき形あり、愛らしく物憐れなる曲舞なり。

氣を換へ引き立ちサラリと詞になる。

扨も二月六日の夜にもなりしかば……

ワキも隙さず引取り威ひよく。

扨は其夜の御遊びなりけり城の内に……

次第に呼吸を詰め威ひよく地へ渡す、地は隙さず受け伸び〳〵と丈夫にうたふ。

拍子を揃へ聲を上げ

此所にて破掛り男舞となる。

舞のあと上羽となり威ひよく流暢にうたふ。

去る程に御舟を始めて

大鼓の頭を聞き地はノリて威ひよくうたふ。

一門皆々我も〳〵と船に浮めば……

シテはさし廻しながら橋掛りへ行き遙に海上を見る形をなし、乘り遲れじより又舞臺へ入り正面先へ出て、遙かにのびたまふと扇をかざして見渡す形をなす、少しく屈たくの心持にて詞をうたひつゝ形あり、併し何所迄も垂れてはならず。

せん方涙に駒をひかへ……

あきれ果たるにて扇づかひあり、氣を換へリンとしたる心持にて。

かゝりける所に

返しに足拍子あり後よりと立歸りキッと見込みて幕の方へ進み、數盛も馬引返しと正面へ出て馬の手綱を引く仕舞をなし、以下文句に合せ太刀を拔きて打合ひ、又組打の仕舞をもなし、落重てと安坐し、打れてと扇にて頭を指して後へ捨て、因果より立ち廻り、ワキに向つて切り込まんとして左へ臥して又臥し返すなど、此切り總じて手數多く中々の見所なり、結局太刀を捨て跡弔ひてと合掌して留める、本より重き能柄ならねども、輕き内に一種掬すべき趣味あり、形としては見るべき個所少なからず、青年の腕だめしとしては、得易からざる良き能といふべきなり。

江口

前シテ……里女　後シテ……江口ノ君　ツレ……遊女

ワキ……旅僧　處……攝津

人生中最も落墮れたる遊女と、清淨無垢なる菩薩とを對照して、平等無差別の哲理を説明せん爲めに、西行法師が江口の里の遊女の所に宿をからんとせしといふ物語と、性空上人が菩薩を拜まんとの祈誓をかけ御夢想によりて室の遊女に遇ひしといふ小説とを取り合せ、西行法師のことゝして爰に一場の夢物語を作曲

せるものなるが、其の間に於て佛法の眞理を說明せる丈け、表面に遊女の船遊び
といふ麗はしき花を飾りながら、其の根柢に動かす可からざる位を附け、自然と
其の曲柄を重々しくせり、井筒、野宮等も類似の曲なれども、何となく此の江口
の方の重くれて聞ゆるは元來の結構の複雜にして佛法の眞理を解けるが爲なり、
麗はしき內に重みあり、艶かしきが如くにして淸淨、浮きやかなるが如くにし
て莊重なるこそ此の謠の本領ならんか。

囃子方の打出す次第の拍子に伴れて大口着の僧ワキ三人出て、舞臺に入りて次第を
謠ふ、此の僧は別に名もなき旅僧なれども、暗に西行法師を想像せしむる必要があり
曲柄が重々しき丈け、自然と位を備へ、シツポリと次第を謠ふ。

月は昔の友ならば、世の外いづくならまし

地取りにツレは坐し、ワキは正面に向きてドツシリと名宣る。

是は諸國一見の僧にて候……

名乘り終りツレも立ち、元の如く三人向き合ひ、打切を聞いて、都かに麗しく道行
を謠ふ。

都をばまた夜深きに旅立ちて、淀の川船行末は鵜殿の芦のほの見えし……

道行濟み、型の如く着セリフあり、ワキは間狂言の、所の者を呼び出し、江口の舊
跡の謂れを聞き、舞臺の正中に來り、或る物を認めたる如く、弔ひの心持をも含みて
滯らざる樣にシツポリと謠ふ。

扨は是なるは江口の君の舊跡かや……

念頃に弔ひて將に立ち去らんとする僧に向ひ遙かに呼び掛けて出づるシテは、小面
鬘、同帶、箔の着付、唐織の着流しにて、扇を持てる女姿なり、何所の誰とも知ら
ねども、艶ける女の如くにして、而も侵す可からざる高尙なる品位あり、シツポリと
氣高く。

のうのうあれなる御僧、今の歌をば何と思ひよりて口ずさび給ひ候ぞ

思ひ掛けなき僧は不審ながらに騒ぎもせず。
不思議やな人家も見えぬ方よりも、女性一人來りつゝ……
品位ある女なれども、既に世を去りし西行法師の詠歌に對して、我身に引受けて答辯するは、よも尋常の女にはあらじ、シックリと。
忘れて年を經し物を、又思ひ染む言の葉の……
扨こそ尋常の女ならじと推せし僧は、心を許さず詰問的にシツカリと。
心得ず假りの宿りを惜しむ君かなと、西行法師が詠ぜし跡を……
女は輕く受け流して、僧に其の返歌をも詠吟せしむ。
いやさればこう惜しまぬよしの御返事を、申しゝ歌をば何とてか、詠じもせさせ給はざらん
不審せし僧は何時となく其の女の術中に陥りて。
實に其の返歌の言の葉は世を厭ふ
女は隙さず之れを受けて。

人とし聞けば假りの宿に、心留むなと思ふばかりぞ……
僧は既に夢中の人となりて。
實に理なり西行も、假りの宿りを捨人といひ
女は愈々普通の者ならず、西行に宿をかさゞりし主なることをほのめかして。
此方も名におふ色好みの、家にはさしも埋木の、人しれぬことのみ多き宿に
同化せし夢中の僧と女は、次第に呼吸を詰め、氣を掛けて謠ひ進み、シックリと地へ渡し　地はシットリと受け麗はしく物々しく謠ふ。
惜しむこそ、惜しまぬ假りの宿なるを、などや惜しむと夕波の……
先づ無差別の一例を擧げて宿を惜しまぬ申譯となす、此間シテは唯出て開きワキへ心付くる丈けのことにてロンギとなる、普通此の如き亡靈は容易に其の本性を顯はさぬが常なるに、此の江口は始めより、西行に宿を貸さゞりし女なることを隱さんとせずして、早く尋常の女にあらざることを示せり、是れ後半に於て十分にシックリせる

趣を見する爲めに、勉めて其の前半を簡潔にせるものならん、作者の注意至れりといふべし、ロンギは浮きやかにシッポリと。

實にや浮世の物語、聞けば姿も黄昏に、かげろふ人は如何ならん

シテは一段シッポリと花の夕霧に包まれたるが如く。

黄昏にたゝずむ影はほの〳〵と、見え隠れなる川殿に、江口の流れの、君とつ見えん耻かしや

姿の消え行くと共に事柄は次第に明瞭となり、遂に我れこそ昔の江口の遊女よと名宣りて中入となる、形として別段の事もあらねども、夕暮に川霧の茫々と立ち被ふ中に花の如き氣高き美女の見え隠れに、其れと名宣りて消え失する樣は、此の謡の働きによりて觀者の目前に彷彿たらしむる所、最も注意すべき謡所なり。

中入中曇に僧に舊跡を敎へし所の者出で來り、江口の君の昔語を爲す。

屋形船の作り物を橋掛りへ出したる後、ワキは待謡をうたふ、普通の待謡と異り、遊女の船遊びの模樣を示せるものなれば、浮きやかに美しく謡ふ。

さては江口の君の幽靈假りに顯はれ、我に言葉を交しけるぞや……

一聲の拍子につれ、シテは二人のツレ女を前後に隨へ出でて船に乘る、シテ面、鬘は前のまゝにて、緋大口を穿き、唐織の壺折をなし、腰帶をし、扇を持つ、ツレは唐織の着流しにて、後に在りて棹を持つ方は一方の肩を脱ぐ、一聲の打上を聞いて、麗はしく謡ふ。

河船を止めて逢瀬の波枕……

他に類のなき後シテの出の模樣にて、曇に不思議なる女に出遇ひし僧は、今又夢中に多くの遊女の川船に乘りて、謡ひ遊べる有樣を見つゝあるものにて、多くの觀客もいつしか共に夢中の人となりて、江口の遊女の川遊遙を目前に見る心地せるなるべし、果して觀客を夢中の人たらしむるや否やは、全く演者の手腕によるものにて、此の所亦大切の謡所なり。

ワキは地の切るゝや切れぬに隙さず掛りて、サラリと麗はしく。

ふしぎやな月澄み渡る水の面に……

シテはシトヤカに美しく。

何此舟を誰が舟とは、恥かしながら古への、江口の君の川遊遊の、月の夜舟を御覽ぜよ

シテ、ワキ、ツレ各々其の位を持ち、隙さず謡ひ進み、「むつかしや」と謡ひ切り、氣を換へ、麗はしく伸々と、シテツレ連吟にて。

秋の水、漂り落ちて去る船の

シテは隙さず受けて、十分に呼吸を詰めながら輕く地へ渡す、僅かの所ながら注意すべき聞所なり。

月も影さす棹の歌

地は輕く受け、障らぬ樣にシッポリと謡ふ。

歌へや歌へうたかたの……

シテは多くの遊女と共に謡ひつ舞ひつ遊び居る態度にて、左右の手にてツレヘアシ

ラヒながら船より出で、舞臺に入り、何所迄も舞ひつゝある心を忘れず左右止めにて床几にかゝる、ツレ二人はクリ地の所にてシテの後を通り、笛坐の前へ坐す、此一段こそ此の曲中の花とも見るべき所にて、他に類のなき面白き要所なり。

クリ、サシ、クセは例の通りにて、クリは華やかに、サシはサラリ、クセはシックリとして序破急の順序を踏むべきなるが、此所は專ら人生因果應報の理を說きしものなれば、自から莊重となりて前の川遊びの場とは大いに其の趣を異にす、クセは舞クセにて、文句に合せての所作もあれども、多くは普通クセ舞の手續にて、意味ある形よりは姿勢の美を示す方のもの多し、世間觀能者の內には、往々クセ舞を見て、何の事とも分らずといふ人あり、是れクセ舞其のものゝ性質を辨へぬより起る疑問なれば、此の機會に於て其の說明を試むべし、元來能は其の趣を示すといふことを主とせるものなれば、此の江口のクセの如きは、人生の無情を覺らしむる一種の說法に過ぎず、見る者聞く者をして、佛前に坐して其の敎へを聞くの想ひあらしむれば足るな

り、若しクセ舞をして彼の歌舞伎の振りの如きものとせば、「翠帳紅閨に枕を並べし妹、春も」といふ文句に合せては、枕を二つ持ち出して並べるか、左右の指を前へ出して並べ立つるかする筈なれど、能にては扇を上げて僅かに頭をさすに止め、流義によりては其の形さへせぬもありて、唯僅かに其の面影を示すに過ぎず、而して其の一擧一動悉く姿勢の美を示すを主として意味を含める所作少なし、意味を含める所作としては、山と言へば遙かに向を見、月といへば上を眺め、枕といへば頭をさし、涙といへば目を覆ひ、松原、海、松風、嵐などいへば一方を見廻はすなど僅かに其の模樣を浮ましむるのみにて、大體の趣を顯すを以て主眼とす、且つ曲舞には大要定まる手數あり、之れに基づき、其の間に於て僅かに文句を添へての形を挿むのみ、曲舞を見て其の意味を探らんとするが如きは、繪畫を見て其の語らざるを非難すると同一なり、クセ終り、面白やと序の舞に入る、舞は愈々意味なきものにて形としては其の姿勢の美を示すを主とし、笛の譜と拍子を合せて、定まれる形を運ぶ間に、緩急抑揚の別ありて拍子と形の呼吸の一致する鹽梅など此の舞の趣として尊ばるゝものなり、舞を見慣れざる人の目には、舞の間は終始同一のことを繰返すが如くいふものあれども、此の舞の手には一つとして同じきことなく、扇を壘むか之れを開くか、又其の持方の違ふか、體の動かし方が異なるか、其の姿勢は皆悉く變化を示し、拍子にも亦序破急の區別あり、三段又は五段の區域ありて其れ〴〵變化をなす、之れを同一なりと見るは、山を見て山は何れも丸きものなりといふ小兒の見解と等しきのみ。

舞の終りは上羽にて「實相無漏の大海に」と謠ひ、其より地と掛合にて謠ひつ舞ひつ、曲中第一の活動場所となり、次第に謠の呼吸も詰み、舞の形も忙しくなり、「あらよしなや」と一段落を告げて鎭る、爰にて氣を換へ、靜かに輕く。

思へば假りの宿

地の返した拍子踏み、「心とむなと」ワキを卷さして開きて下に居り、是れより次第に重みつき、「是迄なりや歸る」と立ち上り、「普賢菩薩と顯れ」と開く所は、此のシテ

の位を見する最大要所にて、果して光明赫奕たる菩薩と拜まるゝか、平凡なる何某が舞臺に立つて居るとのみ見らるゝか、能樂の眞價は實に斯る靜止中の活動に存するなり、其れより「船は白象となりつゝ、光りと共に白砂の、白雲に打乘りて西の空に、行き給ふ」と終局に至る數句の間こそ、實に此の曲の貫目を見する所なり、此シテと地謠にして、能く此の精神を發揮し得ば、場中には白雲たなびき、靈光の隈なく輝くを見るべし。

蘆刈

シテ……日下左衞門　ツレ……女
ワキ……從者　處……攝津

日下左衞門といへる人、零落して夫婦分れをし、我身は難波津に蘆賣となり、妻は都に奉公せしが、妻は身分よくなりしを以て難波津に尋ね下り、始は蘆賣り男を夫とは覺らざりしが、遂に名乘り合ひて、共に目出度く都へ上るといふ筋にて大和物語より出し歌物語なり、貧にも心の替らざりし偕老の契りの末遂げし目出度例として婚禮の席には必ず持ち出さるゝ祝言謠となりしが、元來が歌物語より出し丈けに和歌が骨子となり、文中引用されし古歌の數も少なからず、難波の名所に名物の蘆を配合し、清貧に安んずる雅男の、御津ケ濱の問答より所の美景を捕へ、笠の緣をたどりて打興ずるは曲中第一の要所にて、笠の段の名の夙に世に鳴る所以なり、前半は優雅に、後半は快活に、清秀の氣の通ずる所此曲の骨子ならんか。

囃子方着坐後・穗付きの蘆を以て圍へる作り物を出すと否とは流義によりて差異あり、小面、着流しのツレ女と、段のしめ、素袍上下の脇男三人と次第にて出で、サラリと品よく次第を謠ふ。

古き都の道なれや、こゝ、難波の浦を尋ねん

名乗り道行常の如く、先づかう〳〵御座候へにてツレ及ワキツレは脇座に着き、ワキは後見座に向ひ、間狂言の所の者を呼び出し、日下左衞門の行衞を尋ね、今は此所には居らぬと聞て、此旨をツレ女へ報告し、暫く滯留して其の行衞を尋ねたしとの希望を聞き、更に所の者に其由を告げ、滯留中何か面白き者あらば見せて呉れよと頼み置きて脇座に復す。

サラリと勇ましき一聲の拍子に伴れ、段のしめ又は厚板の着付に大口を穿き、水衣の肩を取り、笠を被り、竹に蘆を挿みたるを擔ぎし男のシテ出、橋掛にてサラリと謡ふ。

足引の山こそ霞め難波江に、向ふは波の淡路がた……

氣を替へノリて麗はしく。

難波なるみつとは言はじかゝる身に

謡ひながら蘆にてサシて出開き、地は隙さず受けて麗かに謡ふ。

我だに知らぬ面忘れ

此地謡に伴れて舞臺に入り、爰にてカケリとなる、カケリは其場の趣きを添へる一種の働きにて修羅物にては奮闘の狀を形容し、狂女ものにては其の狂態を示す、此の曲狂ひものにはあらざれ共、蘆を賣る爲めに面白く打興ずる樣を形容するものにて其趣き狂物のカケリに類す、カケリの打上を聞て、ノリ拍子を踏みながら、流麗にうたふ。

立ち舞ふ市の中々に

地は隙さず受けて麗はしくうたふ。

隱れ所はあるものを

シテは此の地謡につれて左へ廻り開き笠を脱ぎ左の手に持ち正面向きて名乗る、流義によりては此所にて笠をも脱がず、サシ謡となり、下歌の地謡に伴れて思ひを述ぶる形を爲すもあり、其後に笠を脱ぎて脇より呼び掛るは何れも同樣なり。

いかに是なる人に申すべき事の候

シテは何心なく。

此方の事にて候か何事にて候ぞ

是れよゐ蘆の問答となり互ひに謠ひ進みて威ひよく地へ渡し、地は隙さず受けてサラリと謠ふ。

むつかしや難波の浦のよしあしも……

打興じつゝ蘆を賣らんとする場にて普通の立廻りあり、「おあし添へて」と蘆を挿みし竹を前へ出し一方の手に扇を持添へて脇へ對する形は各流通じて此所の一要所なり一轉して露ながらの下歌は少しくシッポリと、併し爰にてダレてはならず、少しく氣を鎮め露を含める蘆に月影を寫す趣きを見するは、此の所の景物として大切なる技所なり、ワキは構はず更に轉じて御津の濱を問ふ。

いかに申候、扨御津の濱とは何くにて候ぞ

此問答が種となりて笠の段を呼び起す、難波の浦に仁德天皇、いや高き稜威に清秀廣活なる風景、自づから氣も暢び心も開けて、堂々と謠ひ進み、波濤海邊、禁裏雲井と廣く高く向上せしめて置いて俄かに、フト寄せ來る漁船に目を附け「や、あれ御覽せよ」と轉化したる妙は、此の笠の段の特に人の嗜好に適する一要素ならん、シテの威ひよく謠ひ捨つるに伴れ、地は隙さず浮きやかに。

名にし負ふ難波津の……

目前に見ゆる風景の海人より雨と轉じ雨より笠と移りて、笠に因める數々の緣語を引き出し、結局ざらり〳〵ざら〳〵ざつと風のあげたる古簾と風の蘆を吹き亂せる樣の形容を以て面白やと納めたる文章の働きは節と形とにも顯れて、最も見るべく聞く可き一大要所なり、段物の多き中にも笠の段は一頭地を拔きて世に持て囃さる、此一段中に付ての區別をいふて見れば、名にし負ふより、「あれ御覽ぜよや人々」迄は、恰もえいや〳〵と網子の網を引立つる如く勢ひよく滯らず謠ひ進み、「面白や心あら

ん」と一沈着して爰に風雅の心を起し、沖に浮める帆掛舟や、彼所此所にと飛びつ浮きつする千鳥鴎の面白き風情を叙し、謠も伸々とすると共に形も鷹揚に風景を目前に浮ませる所あり、雨に着る」と再轉しては、愈々本領の笠の段となり、謠もロンギ風の掛合となり、笠を持出しての形は最も波瀾に富み、手數も多く足拍子も面白く、多くの能中稀れに見る技所なり、笠の段の名高きこと偶然にあらざるなり。

ツレ女は此の興ある擧動の内に此蘆賣男の尋常人にあらざるを認めて脇の男を呼ぶ。

いかに誰かある、ワキ「御前に候……

是れより蘆を買ふことゝなり直接にツレ女の前に持ち行かしむれば、豈計らんや此の輿の内の女は古の我が女房なれば、男は驚きて逃げ隱れ、女は跡を慕ひて、少しは燒餅めきしイチャ付も交りて後爰に夫婦再會の場となる、若し此の文句の意味を、寫實的なる芝居にて演ぜしめば、實に見て居られぬ嫌味な場となるべからんに、其情緒を和歌に言はせて、最も品位よく夫婦和合の實を示せるは、能樂の特長を發揮せる最掘强の證明所なるべし、爰所はシテ、ツレ共に大切の謠所にて全く謠の巧拙によりて此の場の趣きの品位に高下を生ずるなり、蘆の家の戸を押明けて出づる所は悠揚として迫らぬ態度にて、武藏野に月を見るの感あらしめたし、曲の死活は多くは是れ迄にて、以下は趣きを一變し、一直線に喜悅の場となり、シテは折烏帽子直垂の威嚴ある姿となり、謠も爽快、形も活達、勇ましき男舞に目出度其局を結ぶ。

安達原（一名黑塚）

前シテ……女　後シテ……鬼女

ワキ……山伏　處……陸奥

茫漠として薄生ひ茂れる原野の一つ屋に、物思ひある女の獨り住居、一見して既に並の人間にあらざるを想像するに足れり、而も日既に暮れ、他に宿るべき家もなく、火の光りを頼りに尋ね行く物淋しさは、實に此の一曲の基礎にして、之

れを飾るに糸車を以てし、糸に因める數々の詞を以て更に之れを美化したるこそ實に前半の抑揚にして、中入前既に此の家の尋常ならぬを示し、後半天地一變慘然猛然、惡鬼法力に敵せずして遂に逃がれ去るに終る、是れ全く古昔安達ケ原の黑塚に鬼の籠れりといふ傳説に基けるものにして、悽愴の内に前後の變化あり、冗長ならずして波瀾あり、一進歩したる作曲といふべきなり。

囃子方着座すれば幕もて包める一つ家の作り物を出し、シテは此の内に入りて出て下に居る。

次第にてワキ兩人出づる、厚板の着附、水衣、大口、頭巾、條かけ、小刀等例の山伏姿なり、舞臺に入りて相對し、氣を掛け勢ひよく、次第を謠ふ。

旅の衣は篠懸の、く、露けき袖やしをるらん

地取りにて、正面へ直し、面々に謠ひ、連吟となれば又相對して謠ふ、此邊總て威ひよくサラリと謠ふ、山野に分登る荒行者の意氣込なり。

是しは那智の東光坊の岡闇梨……

日も重ればよりワキは道行をなし、着にけりと舞臺の中央に止り、正面向きて着セリフを謠ひ、兩人共ワキ座へ至り立ち居る。

幕は取り拂はれ萩柴にて圍へる一つ家は顯る、シテは此の内より何となく物思ひある心入にて伸々と謠ふ。此の謠方本より陰氣なれ共、能く隅々迄聞えざる可らず、朗かなりとて陽氣なる可らず、荒野の一つ屋に尋常ならぬ女の住居の模樣は、此のサシの謠にて知らるゝものと心得べし、シテ面は曲見、鬘、同帶、熨斗目の着附、厚板の着流にて中老女の姿なり。

ワキは漸く宿を見附けたる嬉しさに威ひよく宿を乞ふ。

いかに此の屋の内へ案内申し候ふ

通常の答へなれども何となく物凄し。

そも如何なる人ぞ

安達原

ワキツレは威ひよくサラリと。

いかにや主聞給へ……

シテは物淋しくドッシリと。

人里遠き此の野邊の……

ワキは伸々と滯らず。

よしや旅寢の草枕……

互ひに謠ひ進みてドッシリと地へ渡し、地は直に受けてシッポリと謠ふ。

さらばとゞまり給へとて屏を開き立ち出る

シテは戸を開き出て又戸を閉ぢ下に居り、地は打切にて氣を換へ伸々とうたふ、然ども何となく陽氣ならず。

異草も交る茅鍾……

此の謠の間に後見人は枠綛を持ち出て正面へ置く、ワキは地謠終ると直にシテに向

ひ。

今宵の御宿返すがへす、も難有う候、又是は何と申す物にて候ぞ

シテは靜かに何となく物凄く。

さん候是はわくかせわとていやしき賤女の營む業にて候

ワキは何氣なく打興じたる心持にて。

あら面白や、さらば終夜營ふで御見せ候へ

シテはシットリと。

實に恥かしや旅人の見る目も恥ぢずいつとなき

少しく氣を換へ伸々と。

賤が業こそ物うけれ

ワキは隙さずうきやかに。

今宵とゞまる此宿の主の情深き夜の

安達原

シテもうきやかに。
月もさし入る
ワキはシツカリと。
閨の内に
地はシツトリと伸びやかに。
麻苧の糸をくりかへし……
此所にて糸をくる形あり、地取りで沈みたるを一變し浮き立ちて伸々と但陰は離れず。
賤がうみ苧の夜までも
地は隙さず取つて浮きやかに但陽氣ならず。
世渡る業こそ物うけれ
シテは身を歎く心持ながら伸々と謠ひ終りにシオル。

あさましや人界に生を受けながら……
ワキは慰め顔に諭す心持にて。
はかなの人の言の葉や……
地は同じ心ながらサラリ。
かゝる憂世にながらへて……
打切につれてシツポリと鎮る。
佛果の緣とならざらん
打切にて位を定めシツトリと謠ひ出す但し滯らぬ樣に。
唯是れ池水火風の……
打切にて氣を換へ浮き立ちて、但しコケヌ樣に。
扨そも五條わたりにて……
シテはシツカリと沈着て。

日陰の糸の冠着し……

地は氣を掛けて。

加茂のみあれにかざりしは

シテはシツトリ地は浮き立ちたる兼合にて謡ひ行き、長き命の返しより次第に詰み、音を、、、のみの返しにて篤と鎮りシテは総の棒を捨てゝ安坐して双手にてシオル、此ロンギの内今はた賤がより再び糸を繰る形もあり、技としてさしたる事ならね共、此の糸の繰方は其れ〴〵文字に當てゝの内規もあり、謡の位に合せての心持もあり、易きが如くにして中々六かしき場所がらなり、且つ謡としても前半中の聞所なり。地謡終りてシテはやをら膝を立て直しワキに向ひて何氣なく言ひ掛くる。

いかに客僧逢に申し候

ワキも何心なく。

承り候

是れより後の應答は流義により差あり上掛りはシテ山に入りて薪を取り來らんと言ひて、ワキは直に之れを受諾し、下掛りにては女人といひ夜半なればと辭退し、何時も通ひ慣れたる道なりといふによりて、然ばやがて御歸り候へとなり、又閨の内を見る可らずといふ所も下掛りの方では、俄に思ひ出したる樣子にて中途よりのう〳〵と呼び掛けて此の事を言ひ、上掛りは如何に申し候とシックリと言ひ出し、此方の客僧も御寛じ候なとツレワキへ迄入念する點に於て大いに注意の異なる模樣を示せり、何れにしても此所前半中第一の思入れ場にて最き注意すべき見所なり。

シテ入りて後狂言方の能力出で、此家の主婦の何となく物凄きは尋常人にあらざるべく且つ閨の内を見なよと注意せしは愈々以て不審なり、之れを檢せんものとて主僧の許可を乞ひしに、主僧は主婦と契約したればとて之れを許さず、既に夜も更けたれば休息せよとて、就れも就眠せんとす、能力も止を得ず共に眠らんとすれど、眠られず、窃かに逃れ出でて閨を見んとし、主僧に見咎められて叱らるゝ可笑しみなどあり、

結局抜け出でて閨の内を見れば、屍體白骨の堆積せるあるに驚き之れを主僧に告げて逃げ行くことゝなる。

ワキは此報告を聞き一度は其の制止を破りしを咎めしも、現在怪しき閨の内の有樣を聞きては打捨て置かれず、兩人打連れ立ちて其の閨の内を實見するに至る、先づ窺ひ寄る心持ちにて徐に近づき、キット閨の内を見込み、一二足後にシザリさも驚きたる樣にて威ひ鋭く謡ひ出す。

不思議や主の閨の内を……

ツレは愈々驚きたる心持にてサラリと。

恐ろしやかゝる憂目を陸奥の……

ツレの謡の終りより双方向き合ひ、最も驚きつゝ馳せ去らんとする思入れにて。

心も惑ひ肝を消し……

脇座の方に向ひ更に正面の方に歩みて逃げ行く有樣を示す。

走りと稱する急調なる囃子に連れて後シテ出づる、面般若、箔の着附、厚板の腰卷但丸盡しは用ゐず、又時としては腰卷せず大口を用ることもあり、又替裝束としては法被、半切、赤頭を用る事もあれ共、左樣の時は早笛となり、面もべシミとなる、何れ共に柴を負ひ打杖を持ちて走り出で橋掛りより威ひ強くワキを呼び止む。

いかに客僧止れとこそ……

此邊り地もシテも勢ひ烈し／謡ひ進み、形も數々の手配りありて、何れも其景色の凄じき模樣を見せ、當りを拂つてよりワキはシテへ迫りて祈りに掛り、シテは柴を捨てワキを追ひつゝ舞臺に入り働きとなる。

働きはイノリとも唱へワキは法力に依りて鎭めんと祈り、鬼女は我が威力によりて之れを挫かんとし、双方奮闘の狀を示せるものにて柱卷と稱する形もあり、之れを三段に分ちて一定せる囃子方の手續あるなり。

働終りワキ兩人は愈々精神をこめて經文を唱ふ。

東方に降三世明王……

經文の地謠に連れてワキは祈りシテは之れに當り奮戰搦鬪の後遂に法力に敵しかね鬼女は祈り伏せられて平臥し、ワキは脇座に復す。

シテは幾干か威の挫けし心持にて。

今まではさしも實に

地も少しく氣を寛むれ共謠がダレてはならず何所迄も引立ちて謠ひ進み、シテは天地と上下をさし、足元はよろ〳〵と後へシザリ、黑塚にと作物を見込み、愧かしとワキの方へ行き顏を背けて隱すなどの形もあり、結局橋掛りへ行き、飛び廻り扇を左へ取り被ひつゝ臥して留めとなる。

卷絹

シテ……神巫　ワキ……官人　處……京都

御和歌題「寒月照梅花」に思ひよりて此の曲を撰めり、曲中月の梅花を照せる景色は無けれども、本有の靈光忽に照し、自性の月やうやく雲をさまれり」の句もあれば、梅が香を慕ひて口吟せし詠歌の神慮に叶ひて、其罪を免さるゝは、慈悲の光明の月よりも尙明かなるを證するに足れり。

此曲は天神の靈威を示せるものにて、神子は人間にして人間にあらず、初より神靈の化顯と見てよし、女性的にして而も侵す可らざる神々しき趣きは、猶梅花の霜を凌いで香を放てるがごとし、三番目にも用れば脇能にも用ゆ、又時として四番目に使ふこともあり、靜かにやさしき中に神々しきが此の曲の本領ならんか。

先づ前折烏帽子に大口、狩衣又風折、長絹の大臣裝ひせるワキ、狂言の男を伴ひて出で、狂言は板付にクツロギ、ワキは常座に立ちて、通常の位にて名宣る。

抑〻是は當今に仕へ奉る臣下なり……

名宣終り狂言の男を呼び出し、都より卷絹を持て來らば此方へ申せと命じ、ワキ坐

へ行きて坐し、次第の拍子に伴れて、段のしめに素袍の連男、卷絹を竹に挿みたるを擔げて出づ、舞臺に入り、例の如く大小の方へ角かけて向ひ、靜かにサラリと次第を謡ふ、何となくしほらしき趣きなくてはならず、威ひ過ては不調和なり。

今を始の旅衣、紀の路にいざや急がん

地取りにて正面に向き、しほらしくサラリと謡ふ。

都のてぶりなりとても……

下歌上歌例の如く、着セリフの後「先々音無の天神へ參らばやと思ひ候」と舞臺の前へ進むは神前へ赴きし樣にて、フト梅花の香をかぎ付けし心持にて「や」と謡ひ、尋ね見る心持にて右の方を見て、「實是なる梅にて候」と梅花を認め「此梅を見て何となく思ひ連ねて候」と謡ひながら下に居り、手を合せて正面を拜み。

南無天滿天神、心中の願を叶へて賜り候へ

地の靜かに受けて謡ひ出すと共に、徐に立ち卷絹を擔げ、一旦後見坐へクツロギ。

橋掛へ行きて案内を乞ふ、狂言取り次ぎて舞臺へ入り下に居る、ワキは威ひ鋭く。

何とて遲れたるぞ、其爲に日數を定め參る中に汝一人愚なる

地は隙さず受け威ひよく引立ちて謡ふ。

其身の科はのがれじと

此所にて囃子方は上略を打つ間に、ワキは狂言方に縛せよと嚴命し、狂言は木綿に一絢る繩を持ち出でツレへ掛る、地は威ひよく謡ひ進む。

其身の科はのがれじと、やがていましめあらけなき、苦を見せて目のあたり、理の報を知らせけり〳〵

遙か彼方に聲あつて、面增、鬘、同帶、前折烏帽子、箔、大口、水衣、木綿手繦を掛けし神子姿のシテ幕を揚げ出る。女らしく靜なる內に、何となく侵す可らざる神々しき氣品を帶びて。

のう〳〵其下人をば何として縛しめ給ふぞ……

謡ひながら進み來り、一の松の所にて止り、拍子に掛り靜かに謡ふ。

とけや手柳の亂髪

地は太鼓の打返しを聞て、静かに可愛らしく謠ふに伴れ、シテは舞臺に入り、「此手を見れば」とツレを見、「心強く」と少しく後へシザリ、「情なや」とシホル。

此所僅かの場所なれども、人間にして人間にあらざる神子の不思議の擧動をなして人を驚かす所にて、浮きやかなる地謠の内に、尋常ならぬ模樣を示す、シテとして心持のある大切の個所なり、ワキは此不可思議なる出來事に驚きたる體にて。

是は扨も申したる御事に候ぞ

シテは最も鷹揚なる態度にてシッカリと。

此者は音無の天神にて、一首の歌を讀み、我に手向し者なれば、とく〳〵縄を解き給へ

我に手向けしの一句は、正に此女の尋常にあらざるを證するものにて、ワキは大いに恐縮しながら、役目の手前此まゝにもならず、今一應の質問を試む。

是ぱ不思議なる事な承り候ものかな……

シテは愈々威嚴を保ちて。

猶も神慮を偽りとや……

愈々尋常ならぬ模樣にワキは詮方なく。

此上はとかく申すに及ばず……

縛されし男は、此不思議な有樣に力を得て、聲もさわやかに、サラリと。

今は憚り申すに及ばず……

一段落をつけ落着て、口吟の心持にてサラリと。

音なしにかつ咲き初る梅の花

シテは隙さずハッキリと。

匂はざりせば誰か知るべきと

一段と氣を引立て乘りて太くシッカリと。

讀みしは疑ひなきものを

地は隙さず受け引立ちて威ひよく謠ふ。

もとより正直捨方便の誓……

シテは前へ出て開き「疑はせ給はで」とワキへアシラヒ「又は心中」より左廻り、シテ柱の方へ行きて、引返してツレを見込、スル〳〵と進みより、「打解け」とツレの後へ下に居り縄を取り捨てゝ、「疾くゆるし給へや」とワキへ心付する、此所謠も滯らざる樣謠ひながら、文句に合せて幾干の心持あり、シテ亦中々の形所にて注意すべき見所、聞所なり。

爰にてツレは起ちて笛座の上に坐し、シテは大小前に行き地は引立ち麗はしく謠ふ。

夫れ神は人の敬ふによつて威を増し……

本ユリにてユリ下げ靜りたる所にて、一調子下げながら、氣を換へサラリと。

されば樂む世に逢ふ事……

クセ舞は別段のこともなく、「一首を詠ずれば」より立ち、さし開き左右にて上羽後は少しく普通のクセ舞と事變り、「御手を取り」と扇を左へ取り、「かびらゑ」と扇をなびかし、「契りし」と右へ取り、「文珠の御顏」と手を合すなど異樣の仕形あれども、是れとても、唯文句に合せて僅かに仕形を爲せるのみにて、本より別段の意味あるにあらず、姿勢の美を示すを以て要點とせることは、普通のクセ舞に異なることなし、クセは例の序破急の位にて靜かに勇ましく謠ふ。

ワキは愈々神慮の賢きを敬ひて、祝詞を參らせられよと乞ひ、シテは幣を持ちて祝詞にかゝる、女性丈けに麗しく神々しくシツカリとコイ合を聞て謠ふ。

謹上再拜、抑も富山は法性國の巽……

地は莊嚴に謠ひ、シツトリと靜りて神樂にかゝる。

神樂は流義により五段神樂となるもあれば幣捨てとなるもあり、五段神樂の方が一層重き位となる。

神樂終りて太鼓の頭にて位を定め、勇ましくサラリと謠ふ。

不思議や亂詞の神子物狂ひ……

次第に詰む心持にて「恐しけれ」と破の舞又はイロエとなる。

破の舞のあとの太鼓の頭にて靜り、シットリとシテは謠ひ出す。

證誠殿は阿彌陀如來

是れよりシテと地と一句置きの掛合となり、さし、開き、廻り等普通の立廻りの間に進行し、「數々の神々」以下次第に進み行く、其間に受渡し、呼吸の差引等は曲中の注意すべき要所にて、「御幣も亂れて」より謠の次第に詰むと共に、シテの擧動も際立ちて活動し、「神は上らせ給ふと言ひ捨る」とあとへシザリ座して幣を捨てると共に謠も靜り、爰に人間の神子に返りて悠々と退場す、夢覺めて尙神德の尊さを忘るゝ能はず。

朝長

前シテ……青墓の長　後シテ……朝長靈　ツレ……女

ワキ……旅僧　ツレ……從僧　處……美濃

朝長は修羅能中最も重きものとせられたり、何が故に此の能が重きか、朝長は義朝の二男にして太夫之進に過ぎず、其の身分より見て敦盛、經政、知章等に超えたりといふ可からず、尊き經文の懺法といふことによりて能を重くせることあれども、是れは其の小書の場合而も後半に限られしことにて、此の經文あるが爲めに其の全體を重くせりとは受取れず、畢竟此の能の重きものとなりしは作者朝長の死に同情を寄せ、之れを弔ふ手段として、所緣ある僧と、生害の時の宿主なりし青墓の長者を出し、僅か一夜の知遇にても、忘れ得ざる丈けの愛情と、年來の君恩を忘れずして尋ね來れる情誼とを叙して朝長を慕はしき人物ならしめ且つ

其の生害の狀を婦女に語らしむることゝしたれば此の能の前半は全く鬘物と同じ格のものとなりて、他の修羅物と同一視す可らざるに至れり、要するに此の能は前半は三番物と異なることなくして幽靜哀傷の内に戀慕の心を含み後半に於て修羅能の本色を發揮して雄壯となれども何所となくシツトリとせる趣きを離れざるは前半の餘勢と懺法の尊さが及せる重みなるべし。

白衣の僧ワキ三ノ出でツレ二人は坐しワキ一人名宣る、朝長といふ能の位を持ちシツカリと謠ふ。

是は嵯峨清涼寺より出たる僧にて候……

ワキの名宣り終ると共にツレ二人は立ちて進み、ワキに對して三人共に美しく靜かに道行を謠ふ。

近江路や、瀨田の長橋うち渡り……

着セリフありてワキは脇坐に至りて坐し、次第の拍子に伴れてシテ出づる、下掛りはシテ一人なれ共上掛りはツレ出づる、シテは唐織又は厚板の着流しにて面は曲見、流義によりては深井、淺井、近江女等をも用ゆ、併し何れにしても、餘り若き女の裝ひをせざるは、艶氣を避けたる深き注意なるべし、靜かにシツポリと次第を謠ふ。

花の跡訪ふ松風や、雪にも恨なるべし

サシ、下歌、上歌例の如く、サラリ、シツトリ、浮きやかの變化ながら、靜かに物哀れに謠ふ。此の謠の内に何となく色添ひ氣なる文句の交れるは、作者苦心の存する所にて、最も注意すべき要點ならん、若し此の謠にして物淋しく物哀れ氣なるのみなる時は、恰も枯野の原の如くにて引立たざる故に曲見の面を用ゐて、殊に年長けし裝ひさせたる女の口より、穗に出すべき言の葉とか、解けても寢ざれば夢にだに、とかいふ艶氣ある詞を發せしむるは、古葉のみの春草の内にも、僅かに色添ふる花に露を宿せる趣きを加へしものにて、此の爲めにこそ、朝長に對する同情も增して、曲柄に面白味を添ふるなり。形に色を消して詞に情を含ませたる作者の用意、最も味ふべき

ことにはあらざるべきか、謡の内より正面へ進み坐して墓前に拜をなし涙にくれしシテは、フトワキの居るに心付きし模樣にてワキに向ひ、シッポリと。

不思議やな此の御墓所に我ならでは……

雙方の問答によりて共に淺からぬ所緣あることも明かとなりては、亡者に對する同情は他人とは思はれぬ意思の疏通となり、例の如く、ワキはサラリ、シテはシットリの兼合を持ちながら、シッポリと地へ渡し、地はシックリと受けて物淋しく靜かに謡ふ。

死の緣の所もあひにあふはかの……

此所は坐せるまゝ、「北邙の夕煙一片の雲」と煙の立つを物淋しく見送る形をなす外別段の仕形もなく墓前の淋しき光景を示せるのみなり。

ワキの問より發して、シテの語となる、此の語こそ前半中最も大切なる謡所にて朝長生害の所には緩急もあり、其の緩急は其の場の光景を目前に浮ましめん爲めなるが、さりとて物騒がしくなりては、青墓の長者とも言はるゝ女の物語とはならず、女なりとて靜かといふ方へのみ傾きては、居付きて引立ず、居付かず、騒がしからず、女の語たるを失はずして、能く其の場の模樣を寫すといふ心掛けは、決して一時の工面や工夫で出來ることにあらず、能く學び能く習して始めて朝長の語となるに至るべし。

語の末はクドキとなり物哀れに滯らざる樣にシットリと地へ渡す、地は隙さず受けてシッカリと急場の心を失はず引立ながら物哀れに謡ひ、シックリと靜りて、打切となる。

是れを最後の御言葉にて事切れさせ給へば……

打切にて氣を換へ靜かに哀れながら居付ぬ樣引立ちて。

悲しきかなや、形を求むれば……

此の謡を以て、前の物語にて悲慘の最期を遂げたる朝長の遺骸は既に此の土中に埋

つて見んと欲すれども見る能はざる世の無情を覺らするものなれば、觀者の心氣を一轉せしむる大切の謠場なり。

更に氣は轉じて現狀墓前夕暮の景色となれば靜かに物淋しく。

かくて夕陽影うつる……

ポッとせる謠に伴れ、返しよりシテワキ共に立ち、シテはワキを案内して我家へと歸り行く形容をする途中にも、雲たえ〴〵に行く空のと遥かあなたを見やる形をなして其の光景を寫すなどあり、一廻り廻りて我家へ歸り着しことゝなる、爰にて我家へ僧を宿泊さす詞あり、シテは下人にお僧を慰めよと申付けて中入となる。

間狂言の男出でて僧に對面し、朝長最期の樣を語る事例の通りにて、ワキの待謠となる。

さても靈魂朝長の、佛事は樣々多いれども……

ワキはシッカリツレはサラリのサシ謠あり、連吟より普通の待謠となる、待謠の臆臆として震に包まれし月の光りの如くなるは例の如し。

聲澗つや法の山風月ふけて……

出羽にてシテ出づる、面は中將を普通とし、流義によりては十六、今若、若男などを用ゆ、黑垂、梨子打、白鉢卷、唐織・法被、半切、腰帶、太刀の裝ひにて、時としては、唐織の代りに縫箔を、法被の代りに長絹を用るもあり、舞臺に入り、サラリ一と威ひよく。

あらありがたの懺法やな……

經文に至り、地とシテの掛合となるもあれば、ワキとシテの掛合となるもあれども唯願薩埵と太鼓の頭となり、是れより乘地となりて地に移るは何流も同樣なり、後シテとなりては、純粹なる修羅能となれども、田村八島等と同じからず、何所となくシッカリとせる趣さあるは、前半のシックリとせる位より引移りての固有の位と、懺法の尊き經文の德を示せる自然の趣きによるものなるべし、シッカリと威ひよく。

心耳な澄ぜる玉文の瑞諷……

ワキは見掛けて隙さずサラリと。

不思議やな觀音懺法聲すみて……

シテはシッカリと。

本よりも夢まぼろしの假りの世なり……

雙方より次第に呼吸を詰めて地へ渡し、地は隙さず受け、シッカリと威ひよく。

あれはとも言はゞ形や消なまし……

意味ある形ならねども、其の場の模樣を示せる動作は此の後シテの出の所にあり、サシ開き廻りなど活潑なる擧動あり、卷き上げたる水の岩頭より下るが如き威ひにて伸々と謠かくる、クリの謠につれて大小前へ行き床几に掛る、サシは例の如くサラリと。

此のクセは居グセにてシテの形なし、朝長丈けの位を捨てずサラリと。

昔は源平左右にして……

去る程に、嫡子悪源太義平は……

打切にて氣を換へ輕く。

實頼むべき一乘の、功力ながらになどされば……

シテはシッカリと。

梓弓もとの身ながらたまきわる……

シテの謠にてシッカリと地へ渡し、地は隙さず受けて威ひよく。

旗は白雲紅葉の……

此所曲中第一の技所にて床几に掛りながら、白旗赤旗の入り亂れて雲霞の如く軍兵の激しき戰ひの樣を遙かに見やる形より始りて、朝長の膝の口へ流矢の當る所に至り謠にも心持あれば、技にも目立ちたる仕形ありて最も注意すべき見所聞所なり、其れより床几を離れ、前に進みて自から生害の樣を見する所亦一つの要所にて、爰より氣

を換へ、跡弔ひてたび給へと合掌して終曲となる。

半部

シテ……夕顔ノ精　ワキ……僧　處……京都

源氏物語夕顔の卷に基き紫野に住める僧の立花供養を行ひし時夕顔の花の精顯れて源氏夕顔の宿を訪れし昔を物語ることを作れるものなり、元來源氏物語が架空の作りものなるに其の内にものせられたる夕顔の花を捕へ其の精として女人を出現せしめ、朧氣に其の昔を語らしむ、花か人か、夢か幻か、茫漠たる内に夕顔の卷の面影を浮ましむるが此の曲の要點ならんか。

先づ白衣の僧一人出でて名宣る、此の僧を紫野雲林院の僧とせしは此の寺中に紫式部の墓もありて源氏物語と因緣あるより思ひ付きしものなるべし、半部といふ能に

調和よきやうにシッポリと靜に名宣る。

是は都紫野雲林院に住居する僧にて候……

花の供養を取り行はゞやと存候、迄が名のりにて、是れより立花の供養に取り掛るものなり、ワキは舞臺の眞中に坐し、前には數々の立花もあるが如くに、佛前に向つて讀經す、シッカリと沈着て。

敬白立花供養の事……

讀經し終りて徐に立ちワキ坐に行きて端坐す。

小面、鬘、同帶、箔の着付、唐織の着流しの裝ひせるシテ、囃子のアシラヒにて出で舞臺に入りて靜かに謠ふ、日も既に入りかゝりし時東屋の軒に咲きかゝる夕顔の花の元に茫然と行める女の微かに古歌を詠ずる面影は、此の謠の謠方によりて想像せらるゝなれば、僅かに二句の謠ひながら、心して謠ふべき所なり。

手にとればたぶさにけがる立てながら、三世の佛に花たてまつる

白き花の元に花か人かも分け難き程に行める女ありて微かに和歌を詠ぜるに心付ける僧は、別段驚けるといふにもあらねども、奇異の感を起して問ひかくるなれば、少しく氣を掛けて。

不思議やな今までは、草花りようとして……

シテはシツクリとたしなめる如く又申開く如く靜かに。

おろかの御僧の仰せやな……

ワキは半ば覺りしものゝ如くにて氣を掛けながらシツポリと。

實々さぞと夕顔の、花の主は如何なる人ぞ

シテは何となく求むる所あるものゝ如くにて。

名のらすと終には知ろし召さるべし……

ワキは扨はと覺りし心持にて。

扨は此世に亡き人の、花の供養に遇はん爲めか、其に付ても名のり給へ

シテは猶茫漠たる答をなしながら、僧を我が目的の地たる五條の邊へ誘ふべく詞を殘して立花の影に姿を隱す、地への受渡も極めてシツポリとし地謠も靜かに謠ひつゝある間に茫々として煙の如く消え失するなり、此前半は別段形として見るべきこともなく、夕暮の薄暗き内に咲き出でたる夕顔の花の元に何となくものあはれなる女人の何か求むる所あるかの如き態度をもつて、茫然と立ち居れる面影を浮ましむれば足れるなり、中入となりて後わらやに半蔀を附け夕顔を卷き附けたる作り物を出し、シテ柱の前へ置きシテは出でて此の内に入り半蔀を押上げ置く。

ワキは立ちて作り物の方へ進み作り物を見て伸々と麗しく謠ふ。

ありし教に隨つて五條あたりに來て見れば、實にも昔の居坐所、さながら宿りも夕顔の、瓢單しば〳〵空し、草顏淵が巷に滋し

シテは作り物の内に腰かけながら靜かに麗しく謠ふ、愛らしき夕顔の這ひまとひしあづま屋の内より美人の吟聲の漏るゝ樣は猶ほ深く鎖せる藜藿の内より夕陽の殘虹の

美しく窓にうつれる景色を見るにさも似たり。

黎霧深く鎖せり、夕陽の殘虹新に窓を穿つて去る

地は隙さず受けて麗しく。

愁たんの泉の聲

シテも續けて麗しき内よりシックリと抑へて地へ渡す。

雨原憲がとぼそを濕す

地はシッポリと受けて靜かに謠ふ。

さらでも袖を濕すは盧山の雪の曙

深く鎖す、夕陽の殘虹、泉の聲、樞を濕す、と物靜かなる東屋の内より美しき女の顯れて謠ふ聲は麗しきも、何か物思ふ所ありて、遂に濕り勝となりて涙に沈む迄の起伏抑揚の模樣は古語を引ての文句の内に自然に含まれて、此の後シテの出の所の趣きをなす、作り物の内に在る姿は深く鎖してあり、麗しく謠ひ出せし所は夕陽の殘虹にうつるが如く、次第に愁を含む模樣は、礎嘆の泉より雨を呼び樞を濕す順序に於て能く顯る、さらでも袖を濕すは云々とシッポリと謠ひ始めさせたる所など實に何とも言はれぬ趣きをなせり、作者の手腕驚く可く敬ふ可し。

打切にて氣を替へ輕く浮きやかに。

窓頭に向ふ朧月は琴瑟にあたり、愁傷の秋の山、物すごの景色や

右は上歌よりロンギに移る一種の謠ぶりにて、他に例の少い謠ぶりなり、以下は愈よロンギとなり浮きやかに滯らざる樣に謠ふ。

實に物すごき風の音……

地はサラリシテはシックリとの兼合ひは何所も同じロンギの取り合にて爰所亦其の例にもれず、共に謠ひ進みて地の「草の半蔀押しあけて」といふ所よりシテは戸を押開けて徐々と立ち出づるに付き謠もシッカリとなり、「立出る御姿」と愈々靜りシッポリとクセの前提となる、後シテの出より此邊迄總て他に例のなき省略法にて、僅か

の間に數々の變化あり、大に注意すべき謠所なり。

爰より靜かに曲舞となり、夕顔の卷にある源氏の昔を語ることゝなる、謠はシツポリと靜にて曲舞の手も文句に合せ通常と異なるもの多し、注意して見べき所なり。

シツポリと「折てこそ」と謠ひて是れより序の舞となる。

序の舞終りて「折りてこそ」と上羽となり「ほの〳〵見えし花の夕顔」と左右へ乘り込み開き「終の」とワキへ心付し、「常にはとふらひ」と正面へ出で「おはしませ」とワキへ心付「木綿附の鳥の音」と角へ出「鐘もしきりに」と聞く心持あり、「告げ渡る東雲」と東をかざして見込み「あさまにも」より角かけて廻り、「又半蔀の内に入りて」と作り物の内に入り開きて留め後見人は戸を下して終曲す、形として別段の事もあらね共、夕顔の化したる美人の立舞ふ姿の美しさは、源氏物語の美文と相俟つて觀客に與ふる美感如何計りぞや、此の切りの謠も亦此の美しさを顯すが主要點にて立舞ふシテの姿と能く調和する樣品位よく麗しく謠ふべきなり、薫りもゆかしき扇の上に手折りし夕顔の花は、源氏の情にひかれて美女と化して舞歌を奏す、半蔀の曲の優雅なる趣き推して知るべきなり。

盛久

シテ……盛久　ワキ……土屋
ワキツレ従者　處前……近江　後……鎌倉

男物の現在能なり、此の能に就き常に起る疑問は、此盛久といふは、死を恐れて助命を佛に祈誓せし卑怯の武士なるか、死は素より決し居るも、觀音信仰の爲め後世の冥福を祈りしものなるかといふことなるが、是れは無論後段の方にて、死は既に囚人となりし時より決心し、身は亡きものと思へばこそ、心中綽々として餘裕あり、憂愁を去りて後世を樂觀し、京都より鎌倉に向ふ間にも、風景を觀て打興ずる趣きをも示せるなり、盛久は唯一時の勇に誇る猪武者にあらずして、

文武二道に長じ、舞樂にも堪能なる風流の勇士なり、されば此の曲は雄壯を以て其の骨子とし、或は優雅に、或は沈痛に、或は悲壯に、或は莊重に、或は快濶に變化ある裝飾によりて其の場合の趣きを顯せるなり。

此能は其始めの出に於て二別あり、觀世流にてはシテを先に立てゝ出、橋掛を進み行きつゝシテより如何に土屋殿に申すべき事の候と謠ひ掛け歩みながらの應答にて、東山の方へ輿を立てられ候へとなり一の松の邊りにてシテ南無や大慈大悲と謠ふ順序となり、其他の流義にては、シテは舞臺に入りて床几に掛り、ワキ常座に立ち名宣て後シテより如何に土屋殿に申すべき事の候と謠ひかけ、面々東山の方へ輿を立候へにてシテは立ちワキ連は輿をさしかけ、南無や大慈大悲の觀世音と謠ふことゝなる、其順序は何れとしても此所既に身は此の世の外のものとして後世を樂觀せる場合なれば死地に赴く首途ながら沈む心のみならず伸々と立派に謠ふ。

「あら何名殘をしや」と打沈める氣を取直しハツキリと伸びやかに謠ふ。

いつか又清水寺の花盛り
地は隙さず受けて威ひよく。
歸る春なき、名殘かな
シテは更に引立ちて。
音に立てゝも音羽山
地も愈々威ひよく。
瀧津心を人知らじ
シテは氣を替へて麗しくサラリと。
見渡せば柳櫻をこきまぜて……
地は受けてサラリと謠ひ進む内にも文句柄自然に憂愁の氣の離れぬは爭はれぬ所なり。

又いつかはと思ひ出の……

盛久

打切にて氣を替へシッポリながら滯らず。

爰は誰をか松坂や四の宮河原四の辻

又打切にて氣を替へ引立ちて伸々と。

是や此行も歸るも別れては……

此文句の内に橋掛より舞臺へ掛け道行をなすもありせぬもあり是れは流義によりての相違ならん。

又下歌の後打切にて氣を替へ引立ちて浮きやかに。

鹽見坂 橋本の濱名の橋を打渡り

シテはシットリと位取りながら浮きやかに。

旅衣かく來てみんと思ひきや……

次第に謠ひ進むにつれて更に道行の心持の行動あり雪の富士の根と見る形もあり結局鎌倉山に着にけりとシテは脇座に行きて床几にかゝり角かけて居りワキ及太刀持は

後見座にクツロギ與かきはシテを送りし後囃子方の後の座に息ふ、シテはシットリと。

夢中に道あつて磨崖を隔つ……

ワキは此のシテの謠中に立ち出て是れを聞入る態度にてシッカリと。

あらいたはしや、盛久の何事やらん獨り言を仰候……

是れより對面となり應對となりては雄壯の内に情ある古武士の心意氣肝要にて聽く者をして覺えず襟をうるほさしめざる可らず、經文を誦む段となりては、信心を凝らすこと肝要なり、嘗て寶生九郎翁京都にて此の能を演ぜられし時、西村天囚氏これを評し、始めの内は寶生太夫とか盛久とかいふ觀念を以て見て居りしに何時しか我が心は其の演技に釣り込まれて宗教觀念となり了れり是れ此の能の大成功せし證とすべしと、是れ此の場合に於ける必要の注意にて是れを演ずる人の心得べき事ならん。

有がたや大慈大悲は薩埵の悲願、定業亦能轉は菩薩の直道とかや……

此の經文に聞入りシフキは最も謹嚴の態度にてシッカリと。

有りがたや此御經を聽聞申せば、御命も賴もしうこそ候へ

シテはシックリワキはシッカリと双方特有の位を以て謠ひ進み連吟にて更に經文を讀誦す、地はシックリと受けて徐かにドッシリと謠ふ。

此文の如くば、諸〳〵の惡趣をも、三惡道は逃るべしや

打切にて氣を替へ伸々とシッポリと謠ふ、此の謠は盛久の意中を吐露する所なれ共此内に一夜を明し少く睡眠をも爲すものなれば、其趣を見せて徐ろに謠ふべきなり。

昔在靈山の、御名は法華一佛……

シテは深く物に感じたる如くシックリと我が意中を吐やく。

あら不思議や、少し睡眠の内に……

ワキはキッパリと氣を替へ威ひよく。

既に八聲の鳥鳴いて、御最期の時節唯今なり、早々御出候へとよ

シテも氣を換へ斷然たる覺悟にて。

待ち設けたる事なれば……

ワキも愈々威を附けシテも十分決心の意氣にて互ひに隙さず謠ひ進み威ひよく地へ渡す。

地は隙さず受けて丈夫に謠ふ。

夢路を出る曙や、後の世の門出なるらん

武士前後といふ所より輿に乘せワキ、太刀持と後に附て舞臺を一廻りしシテは後見座の所にクッロギ輿より下り、ワキは常座に立ちて威ひ込んで丈夫に謠ふ。

扨由井の汀に着しかば……

シテは謠ひながら進み出で正面の眞中の前へ坐し、十分決意せる態度にて悠々と構へる。

盛久やかて座に直り……

太刀持は最もキッパリせる語氣にてサラリと謠ひながら太刀を扱き振上げてシテの

前へ落し後へシザリ坐してワキへ對す。

太刀取後に廻りつゝ、稱念の聲の下よりも、太刀振り上ぐればこは如何に……

意外に驚ける盛久は呆然と。

盛久も思ひの外なれば、唯茫然と呆れ居たり

ワキはシツカリと。

いや〳〵何をか疑ふべき、此程讀誦の御經の文

互ひに隙さず威ひよく謠ひ進みて地へ渡す。

臨刑欲壽終、ワキ「念彼觀音力……

地は威ひよく受けてサラリと丈夫に。

經文あらたに曇りなき劔段々に折れにけり……

流義によりシテは此時に立つと立ぬとの別あれ共、落ちたる劔をキツと認め、あら有難と經卷を押戴くは同じことなり、此所此の曲中第一の活動場所にて大いに注意すべき見所聞所なり。

打切にて氣を換へ勇ましくサラリと。

やがて此由聞こしめし……

シテは立ちて後見座にクツロギ烏帽子直垂を着る。

物着濟みてシテの進み出るを見掛けワキは威ひよく謠ひかけシテは平伏す。

如何に盛久御前にて候……

シテは恐懼したる態度にてシツカリと。

何をか隱し申すべき、今夜不思議の御靈夢を蒙りて候

ワキはキツパリと。

さらば其靈夢の樣を御前にて眞直に申上られ候へ

シテ畏つて候と答へシツカリとクリの謠ひにかゝり悠々と大小前へ座に着く。

夫れ不就正覺の御誓ひ今以て始めならず

地は受けて伸々と強く謡ふ。

過去久遠の大悲の光り……

サシ、クセ例の如くドッシリと威ひよく謡ふ。

然るに我此の光陰を頼み……

打切にて一段引立ち勇ましくサラリと。

輙朝是を聞こしめし、此曉の御夢想も……

シテは一旦起ちて退かんとし呼び返されて再び返したる樣にて座に就き、ワキは威ひよく盛久亂舞堪能の次第を語る。

如何に盛久、盛久は平家譜代の侍武略の達者……

シテは喜び身に餘りし心にて勇ましくシッカリと。

有難しく得がたきは時……

勇ましく男舞となる。

男舞濟みて地謡は勇ましくサラリと謡ひ進み、シテは平臥してシッカリと。

長居は恐れあり

地は愈々勇ましく爽快に謡ひ終る。

舍利

前シテ……里人　後シテ……足疾鬼　ツレ……韋駄天

ワキ……旅僧　處……京都

都名所圖繪泉涌寺の所に記載したる佛舍利の緣起に基き、之れを現在泉涌寺にて起りし如く改作したるものにて別に深き意味あるものならず、シテの動作の敏活なる點に於て一種の趣味あり、働き能の一種として世に用ゐらる、蓋し敏捷にして活動に長ぜる人を俟つて始めて演ずべき能柄なり。

ワキの出に付き流義により次第のあると名乘りのみとあり、何れ共に普通の旅僧に

て、サラリと謡ふ。

次第「旅の衣の遙々と、〳〵、都にいざや急がん、詞「是は出雲の國三保の關より出たる僧にて候……

道行も亦通常にて　滯らず伸々と謡ふ。

朝立つや、空行く雲の三保の關……

着セリフの後、寺を守る間狂言との應答ありて、佛舍利を拜することゝなり、始めより出しある、作り物の前に進みて拜を爲し、祈念の心持にてサシを謡ふ。

實や事として何か都の愚なかるべきなれども……

能柄丈に滯らぬこと勿論なれども、僧は難有さに感涙を催すといふ程に信心を起す場所にてあり、一方には尋常ならざる物の顯るゝ間の謡なれば、騒々しからずシツクリと謡ふ、此地謡中にワキはワキ坐に赴きシテは出でて舞臺に入る。

有りがたや今も在世の心地して……

シテは里人といつぱ異形の裝ひにて面は、あやかし、三ケ月、眞角の類、黑頭を被り、白鉢巻をしめ、のしめの着付に、水衣を着、腰帶をしめ、扇を持ち出づる、此の裝ひにて既に尋常人にあらざるを想像し得らるゝなり、サラリと滯らざる内にも何となく物々しげに謡ふ。

有難や佛在世の御時は、法の御聲を耳に觸れ……

ワキは之れを見掛け不審に思ひ問ひ掛くる心持にて謡ふ。

我佛前に觀念し、寥々とある折節に……

シテは何氣なくサラリと答ふる内にも何となく物々しげなる趣きあり。

是れは此寺の邊りに住者なるか……

互ひにシテ、ワキの位を持し謡ひ進みてシツクリと地へ渡し、地は隙さず受け文句柄丈けに幽雅なる風景を謡へども、本よりサラリとして滯らず。

月雲の古き寺井の水澄みて……

シテは此の地謡の内、庭の松風の邊りより前へ進みてヒラキ、右廻りて又開き文句

一ばいにワキへ對して坐し、直にクリに移る。

クリ、サシ、クセ、普通の順序にて滯らぬ樣に謠ふ、シテは唯居ながら、ワキにアシラヒある事常の如し、此の間唯佛法東漸を說きし迄にて、別に深き意味なければも、次に來るべき波瀾を活かすべき伏線なれば、サラリと謠ふ內にも自づと聞く人の氣を鎭靜ならしむる心持を含むべし。

夫れ佛法あれば世法あり……

ワキは俄に驚きたる心持にてシッカリと。

不思議やな俄に晴れたる空かき曇り……

シテは以前と變り、疾鬼の本身を顯せる心持にてキッとして。

今は何をか包むべき……

ワキは愈々驚ける樣にて威ひよく。

こはそも見れば不思議やな……

互ひに隙さず諧ひ進みて威ひよく地へ渡し、地は直に受けて威ひ銳く、恰も颶風俄に起り砂を卷き石を飛ばすが如き威ひにて。

（樒沈瑞香の上に立ち上る雲煙を立て稻妻の光りに飛び紛れて……）

返しの上に立ち上る邊りよりシテは立ち上り舞臺を一周したる上足拍子を踏みて威ひよく臺の上に飛上りて廻轉し、牙舍利として安置せる珠を取り上げ、珠の載せありし臺を踏み壞して飛び降り、疾風の如く走り入りて中入となる、此の瞬間の活動こそ實に前半中の一大要所にて、此活動を見せんが爲めに前の靜止の場を設けたるに過ぎず、能樂の妙味は、務めて忍耐して沈靜を守り、一度驚起すれば、迅雷耳を覆ふに暇あらしめざる所に在り。

中入中間狂言出で來りて例の語あり、語濟みて出羽にてシテ出づる、後シテ、面シカミ、赤頭、色鉢卷、厚板、半切、狩衣、（法被にても）にて珠を抱へ出て、舞臺に入り先の方へ出て右へ見廻し、橋掛の方を屹度見込む時、早笛となり、幕の方を屹と見

て、シテは逃ぐるが如くワキ坐の前へ行て臥し右を袖をかづきて隠れ、ツレ韋駄天、面天神、黒垂れ、輪冠、色鉢巻、厚板、側次、を着け打杖を持つて出で、舞臺に入り威ひよくサラリと謠ふ。

抑是は此寺を守護し奉る韋駄天とは我事なり……

其の牙舍利置いて行けとシテの方に向ひ打杖にてサシ開き、此時シテ袖を下してツレの方へ向ひ、シツカリと謠ふ。

いや叶ふまじとよ此佛舍利は……

誰も望と正面向き欲界色界の地謠と共に互ひに向き合ひ、共に足拍子を踏みて舞働となり、舞臺及橋掛に於て韋駄天は疾鬼を打んとしシテは之れを避けて追ひつまくつつの動作あり、地謠の返しより文句に合せ韋駄天は追掛け、疾鬼は逃げ廻ることあり結局臺の上に登り打合ひたる末シテはワキ坐の方へ飛下りて袖をかづきて隠るゝ形あり、爰にてイロエとなりて、韋駄天は見失ひたる疾鬼を探す態度あり、イロエの後、シテは隠る能はずして再び姿を顯し身の置所なく煩悶狀の擧動ありて臺の上へ登るを韋駄天追掛け來りて引下し打据る形等ありて、疾鬼は遂に珠を韋駄天に渡し韋駄天は之れを受取りて勢ひ能く幕に入りシテは文句に合せて大いに困却の狀をなし飛廻りて袖かづきて臥し止めとなる、地は此邊總て威ひ鋭く迅速に謠ひシテ、ツレ双方の活動を十分に見すること此曲の眼目にて、誠に純粋の働能なり、斯る働能に就て最も注意すべき點は活動の迅速なる程愈々整然として騒々しからず、シテ、ツレ兩人の擧動能く一致し規矩正しく行はるゝにあり、如何に或る部分は迅速に活動するも、總ての點に於て整はず、或は齟齬衝突し、亂雜騒喧の傾きある時は、働能として成功したるものと言ふ可らず、容易なる能の如くなれども、此の能をして整然として亂れず、敏捷活動の妙を全うするは、凡手の能くする處にあらざるなり。

咸陽宮

シテ……始皇帝　ツレ……華陽夫人　ワキ……荊軻
ツレ……秦舞陽　ツレ……官人　處……唐土

此の能は脇能の一種にて先づ初めに眞の來序と稱する靜肅なる拍子につれて帝王の出づるといふ特種のものなれば帝皇ものとか、眞の來序ものとか稱しても良き能柄にて漢土歴史中一事蹟に基きて初めは多く宮殿の壯麗と皇帝の威嚴の模樣を示し、中間美人彈琴の一段雅艶優の裡に道火線を伏在せしめ後段一大波瀾を起して活潑壯烈の間に終曲せしむ、變化の妙といひ、壯麗雄武の趣きといひ面白き作柄なり。

囃子方着座大小鼓座の前に大屋臺を出す、是れ世にも名高き秦の都城咸陽宮を示せるものにて僅かに一疊敷大のものを以て廣大壯麗の宮殿を想像せしむ、理想美を主眼

とせる能樂とはいへ作者の大膽亦驚くべきものあり、果して觀る者をして廣大無邊の阿房宮を想像せしむるや否は登場役者の謡と舉動の巧拙如何にあり演奏者の責任も亦大なりといふべし。

先づ官人に扮せる間狂言一人出で宮殿の廣大と始皇帝の威嚴の盛んなること、燕の國の地圖と樊於期の首級を持て來るものあらば厚く褒賞あるべき事を一般に告示せらるゝこと等を述べて退く是れを狂言口開けといふ。

次で眞の來序を打出し、之れにつれてシテ役たる皇帝を先に立て官女大臣等出づる、其數僅かに數名なれども、是れ例の省略法にて貴紳美女は雲の如く花の如く廣大なる宮殿中に光ち滿てるものと想像せざる可らず、皇帝は屋臺に上りて腰桶にかゝり、官女は右、大臣連は左と二行に並び相對して坐し、眞の來序の打上を聞き、徐に最も鷹揚に堂々と謡ひ出す、此の謡によりて宮殿莊嚴の模樣を想像せしむ、謡方の巧拙は此の能全體の結構の上に大影響あり、大いに注意すべき謡所なり。

抑も此の咸陽宮と申は、都の廻り一萬八千三百餘里

大臣の謠はシテに位を讓ること必要なれば、滯らざる樣サラリなれ共、莊嚴の模樣を顯す心は忘れられず、流義によりて地にて謠ふもあり。

内裏は地より三里高く……

次第に呼吸を詰めながら悠々と地へ渡し、地はシツカリ受けて堂々と立派に謠ふ。

登れば玉の階の……

一聲といふ拍子に伴れてワキ役たる荆軻、秦舞陽の兩人出で、橋掛りて向き合ひ、最も威ひよく壯烈に謠ふ。

思ひ立つ朝の雲の旗衣……

連役たる秦舞陽の方はワキに位を讓る丈け一層サラリと烈しく謠ふ、就中石に立つと鋭くワキ謠の切り、矢竹の心と隙さず連吟に移る所は大いに心持の存する個所にて、此邊の謠ぶりにより兩人の心中大いに期する所あるを想見せしめざる可からず。

ワキの道行終りて咸陽宮に着せし由を述べ次で案内を乞ひて來意を告げ、間狂言の官人出でて之れを取次ぎ、參内を許さると同時に大いに警戒を加ふることありて兩人の帶劍を解かしめられ登殿することゝなる。

右の手續き終りて同じく兩人共橋掛に立ち、ワキ先づ威ひよく謠ひ、ツレは一段サラリと謠ひ行く内其の文句に合せ、高大なる宮殿を見上ぐる形、恐懼しながら登り行く樣、秦舞陽の莊嚴に氣を奪れて進み兼て居すくむ樣、荆軻が之れを勵まして引立つる形等大いに見るべき所多く、此の橋掛に兩人の擧動は最も注意すべき要所なり。

ワキ兩人の舞臺に入らんとする時左の謠あり、是れは流義によりシテの謠ふもあれば又大臣の謠ふもあり。

帝はこのよし聞召……

ワキは堂々と左の謠を謠ひながらツレと共に進み入りて左り手へ坐す。

舞陽荆軻は大床の机上に參着申けり

ツレは左の詞を謠ひながら扇を開きを持ちたる振りしてシテの前へ進み置きし如くなして右手の方へ退き臺の傍に坐し、窃に皇帝の擧動に注意し心中大いに期する所あるものゝ如し。

先づ秦舞陽すゝみ出で……

帝は未だ變事のあるを覺らず、兼て希望せるものを得て喜べる色あり、其心をシテ又は大臣にて謠ふ。

帝は笑める御氣色……

ワキ又扇を開き左の詞を謠ひながら皇帝の前に進み物を置きし形をして臺の左手に退き坐し、是れ亦大いに期する所あり。

其時荊軻進み出で……

帝は此に於て始めて不審を起し、急いで此の場を立ち去らんとす。

帝は是れを叙覽あるに……

兼て期したる兩人いかでか目ざす敵手を逸すべけんや兩人等しく帝の袖にすがりて引据るワキは劍を拔てシテの胸先に突付け將に刺し殺さんず勢ひなり、此に於て一つの注意すべき事は其のワキの取出す劍は兼てシテの在りし臺の敷物の下に入れありてワキは之れを取出すなり、能の主旨に詳しからざる觀者にては、何故に劍が此所に隱しあるかを疑ふ人あるべけれども、是れ寫實を離れたる能樂に取りては普通のやり方にて、兼てより此の宮殿内に劍が隱しあるにてはなく、荊軻の携へ來りし燕の國の地圖の下に隱しありしを取出したる譯なれ共、寫實を避けて地圖の箱を持出さゝる故、劍の隱すべき物件なし、依て豫め此の臺の下に劍を入れ置き、箱の中より取出したるものと想像せしむるなり、斯く言はゞ或は寫實を避けし能樂にて何故に殊更に劍を用ゐる必要ありや、想像を以てするならば寧ろ荊軻の手にある扇を以て劍に代用する方輕便なるにあらずやと言ふ人あらんも、是れ程度問題にて、能樂と雖も絶對に寫實を避くるとにはあらず、演藝の品位を傷けず、演藝上支障なき限りは觀者の感覺を惑く

に便利なる道具を使用するは當然の事なり、此の場合に於ては扇を代用するよりは劒を用ゐる方壯烈の點に於て感じよければ、實際箱の内に隠しあるべき劒よりは大きく仰山に拵へたるものを使用しあり、寧ろ誇大にせる側に於て寫實を避けられあり、若し此場合に判官腹切りに使用せる如き九寸五分でも持出したらんには其れこそ寫實の爲めに能樂の品位を損ふものとなるなり、其邊に對する能樂の斟酌は實に能く適度を得たるものにて、斯る點に於て能樂の眞價を味ふべきなり、引据ゑられし帝王も夷然たり取り抑へし兩人も嚴然たる儘傍らより麗しき聲を發し、殺伐たりし場を變じて優雅秀麗の場と化せしむ、即ちシテ連の上位に坐せる花陽夫人は最も麗しき聲を發して訴ふるが如く悲しむが如く伸々と謠ふ、此の變化の妙も亦能樂の特長と知るべし。

淺ましや聖人人に見えずとは今此時にてありけるぞやあら淺ましの御事やな

取抑へし兩人は未だ何たる感じもあらねども引据ゑられし帝王は早くも爰に一計を案じて今はの際に於て美人彈琴の一曲を聞て心殘りのなきことゝしたしと懇請す、勇猛なる兩人もかゝる祕計には心付かず斯く手籠にせる上は最早逃すべき筈なしと安心して其の請を容れ、爰に美人彈琴といふ艶麗の一場を生ず。帝王の命により花陽夫人は麗しく謠ひ出す。

さらば秘曲を奏すべし……

地は之れを受け所謂鬼神も感に堪へ武士も心を和ぐるといふ鹽梅に麗しく伸々と謠ひ聞く者自から恍惚として我身を忘れしむるの妙味を起さしむる必要あり、此の謠の間にワキ兩人は何時となく聞き惚れて茫然として失心せることゝなり行くなれば、此の謠方拙くしては其の模樣を寫すに難く、實に此曲中第一の謠場所にして聞き所なるは勿論、聞き惚れて眠れるが如くなり行くワキ兩人の技能も注意して見るべき要所なり、咸陽宮の琴歌とて著名なること偶然にあらざるなり。

次第に氣の入りし琴歌は終りの眠れるが如くなりといふ所より、心持變りて强くなり、シテはキッと心に決するものあるが如く威ひよく。

、荊軻が控へたる

と謠ひ終ると同時に捕へられし袂を振り切り突立ち樣に臺より飛び下り飛鳥の如く走りて橋掛りへ行き三の松の所へ袖を被きて坐し隱る、シテに取りては此所曲中第一の技所なり、シテの起つ時双方へ轉がり落ちし兩人の内ツレは其儘切戸口より退きワキは驚き起ちて手に持ちし劒をシテ柱の方へ投かけながら端坐して直に切戸口に入る此所又ワキに取りても大切なる技所にて劒の投方なども中々むつかしきものなり、此所の地謠最も急調にて少しにても滯る時は此の急激の場台の趣を損ずる恐れあり最も熟練を要する所なり、人の心を恍惚ならしむる如く優美艶麗なる琴歌より、俄に電光石火も啼ならざる急調に移る變化の有樣は道成寺の蘭拍子より急の舞に移るものと幾干か似たる所あり。

以下は唯結末を付くる丈けの場所にて帝王たるシテは劒を拔き持ち出て舞臺に進み入り兩人を斬り捨てし形をなし、秦の御代萬歳を壽ぶきて感ひよく堂々と此の曲を終る。

賴　政

前シテ……老　翁　後シテ……賴政靈
ワキ……旅　僧　處……山　城

其矢先に罹りし鵺の亡魂をして語らしめ武功に健氣なりし賴政も、宇治橋の合戰に自及せし我末路を自白する場合は物哀れに淋しけれども、所謂文武に名を得し老人者丈けに悠々迫らざる所ありてドッシリとせる位を備へ、一面に名所と和歌を對照せしめて優雅の趣を添へたれば、曲面自ら重みありて修羅能中元老株の内に數へらる。ムックラとせる内に物さびて强味あるが此の能の本領ならんか。

囃子方着座後、一人の旅僧出で、シットリと名宣る。

龍の見方謡の聞き方

是は遠國より出たる僧にて候。我此程は都に出て、洛陽の寺社殘りなく拜み廻りて候。又是より南都へ參らばやと思ひ候。

悠々と風景を詠めつゝ行く心持にて。

あま雲の稻荷の社ふし拜み、〳〵、猶行末は深草や小幡の關を越過て……

着ゼリフの後、正面に進み、篤と景色を見渡したる心持にて伸々と。

實や遠國にて聞及し宇治の里

同じ心持ながらキッパリと。

山の姿川の流れ

シットリと居り合ひて。

おちの里橋の景色、見所多き名所かな

悠々と謡ひ納めて後に氣を換へ、飄然と謡ひながら脇座の方へ行く、此邊りワキに取りて大切の謡ひ所なり。

あはれ里人の來り候へかし

尉髪に三光尉の面を被り、熨斗目、水衣、腰帶の裝ひにて扇を持ちし老人は、幕の内より遥かに呼び止むる。

なふ〳〵御僧は何事を仰せ候ぞ

一度シテの出でて後はシテに位を讓りてスカリと。

是は此所始て一見の者にて候、名所舊跡殘りなく御教へ候へ

我が亡き跡を弔はせん爲めなれば、名所を教へよとの問は待設けたる筈なれども、態と知らぬ風を裝ふ所に、此老人の一樣の者にあらざるを知るべし、シットリと物々しげに。

所には住候へ共、賤しき宇治の里人なれば……

詞はスカリと謡ひ、節となりてシットリと居り合ふは何所も同じ事にて、謡ひながら舞臺へ入る。僧もさる者此老人の尋常人ならぬを察してか、一理窟を附けて問ひ進

む、此邊の文句柄よりしても此曲の一癖あることが知らるゝなり。

辭、左樣には承り候へ共、勸學院の雀は蒙求を囀ると言へり……

釣り込まれたる如くにて次第に我が目的の方へ進む。老人は尙ほトボケたる風にて。

されば、こそ大事の事を御尋あれ、喜選法師が庵は

爰にて正面を受けてシツトリと。

我庵は都の巽鹿ぞすむ

正面を外しながらシツカリと。

世を宇治山と人はいふなり

シツトリとワキの方へ向いて。

人はいふなりとこそ、主だにも申候へ、尉は知らず候

シテの答の不得要領なるに頓着なくワキは尙も問ひ進みて。

又あれに一村の里の見えて候は槇の島候か

實物を指しての問には答へざるを得ず、シテはワキの見たる方を見て。

さん候槇の島とも申、又宇治の川島共申なり

ワキは隙さず、正面の方を見て。

是に見えたる小島が崎は

シテはシツカリと、ワキの指示す方を見て。

名に橘の小島が崎

ワキは愈々問ひすがりて。

向に見えたる寺は、いかさま惠心の僧都の、御法を說し寺候な

シテはワキの問に拘らず、今しも山の端に登れる月影を認めたる心持にてイツ〳〵

と、ワキの方を見又月の方を見て。

なふ〳〵旅人あれ御覽ぜよ

謠は切らず續けながら氣を換へてシツトリと太く、謠ひながらに開く。

名にも似ず月こそ出れ朝日山

地はシットリと受けて、能く此の場の光景を顯す樣に靜かにボウと謠ふ。

月こそ出れ朝日山、山吹の瀨に影見えて……

山吹の瀨よりジリ〳〵出て開き、朧々と見渡す形につれて謠にも心持あり、宇治橋頭月下に見渡す古戰場を敷ふる主は、此の地に心引かるゝ人の亡靈なるを思へば、此一段も趣きある所にて、十分に注意すべき見所聞所なり、實や名にしおふよりは謠ふ心持も常に復し、シテも左り廻りとなりてワキに對して立つ。

名所問答に氣乘せざりし老翁も平等院へは是非誘はでは叶はず。

此所に平等院と申御寺の候をば御覽ぜられて候か

ワキは本より望む所早速に承知して。

不案内の事にて候程に未だ見ず候御教候へ

シテはサラリと。

此方へ御入候へ

ワキを誘ひて寺へ赴きし樣にて少しく前へ出、正面の方を見て、ワキへ向ひながら。

なふ〳〵是こそ平等院にて候へ

少しく右の方を見て。

又此方なるは釣殿と申て面白き所にて候能々御覽候へ

ワキは是れを一々見ながら輕く。

實に面白き所にて候

キット正面の下の方を見、シテに向ひて。

又是成芝を見れば、扇のなりに取殘れて候は謂の候か

シテは愈々我目的の所迄漕付けて、爰に其の昔を語る端緒を得たり、未だ穗に出ね共、何となく内に思ひある如くにて。

さん候是は昔宮軍の在りし時、源三位頼政合戰に打負給ひ……

ワキはさも懐舊の情に打れたる樣にてシツトリと吊ひ顔に。
痛はしやさしも文武に名を得し人なれども……
シテは感謝の意を漏し。
實能く御吊ひ候ものかな、其宮軍の月も日もけふに當りて候
ワキは其奇緣に驚きたる體にて。
何と其宮軍の月も日もけふに當りたると候や
シテは遂に包み切れず、思ひは穂に出でシツトリと。
斯樣に申せば我ながら、餘所にはあらず旅人の……
地は靜に受けてシメヤカにシツトリと謠ふ。
夢の憂世の中宿の……
返しより立ち宇治の橋守と右を受け、老の波とワキの方へと向ひ出て、我賴政が幽
靈と開き、煙の如く消え失する心持にて靜かに中入となる。

間狂言 所の者出で僧と問答の末例の語りとなり、ワキは徐に待謠をうたふ。
扨は賴政の幽靈假に顯れ給ひけるぞや、いざや御跡弔はんと……
一聲にて、賴政頭巾に賴政の面、唐織又は厚板の着付に法被、半切、太刀を佩き、
法被の右の肩脱ぎ、扇を持て後シテ出で、橋掛りにてシツカリと強く謠ふ。
血は豕鹿の河となり、紅波橋を流す……
あら閻浮戀しやと沈みたる氣勢を換へ引立ちて。
伊勢武者は皆緋縅の鎧着て
宇治の網代と謠ひながら右の方を見渡し、かゝりぬるかなと抑へしを更に引立ちて
威勢よく。
うたかたの、哀ばかなき世の中に
謠ひながら出て開き、地の受けて。
蝸牛の角の爭ひも

と謡ふにつれて足拍子を踏みながら左へ進み、其末舞臺に入り、「はかなかりける心かな」と謡ながら開き、ワキへ向ひてシッカリと。

あら尊の御事や、猶々御經讀み給へ

ワキは隙さず氣を掛けてさらりと。

不思議やな法體の身にて甲冑を帶し……

シテはドッシリと。

實や紅は園生に植ても曙れなし……

ワキはズカリ、シテはシッカリとの兼合にて謡ひ進み、シッカリと地へ渡し、地は隙さず受け、威ひよくドッシリと謡ふ。

佛の說し法の場、く、爰ぞ平等大會の功力に賴政が、佛果を得んぞ有がたき

開き居拍子、返しより出て開き、足拍子など武裝的活動を示し、威ひよくノリて。

今は何をか包むべき、是は源三位賴政、執心の波に浮沈む、因果の有樣顯すなり

正面へ出て右へ乘り込み左へ開くなど文句に合して仕形あり、左廻りにして大小前に來りワキへ向ひ、腰桶に掛る迄謡ながらの活動は謡方にも其心あり注意すべき所なり、地は氣を換へサラリと威ひよく謡ふ。

抑も治承の夏の頃……

此クセは仕形ある居クセにて、シテは腰桶に掛りながら文句に合せて形あり。まづ山科の里と右の方を見渡し、宇治の川橋と開て下を見、打渡りと左へ踏み入、煩せ給ひけりとワキへ心付け、平等院と正面向く迄は普通なれど、宇治橋と扇を開きてより中の間引放し、下は川浪、上に立も、と橋板を引放し下に激流を望むなどは一大要所にて謡にも心持あり、仕形も數々あり、曲中の見所聞所なり。シテはシッカリと威ひよく語る。

かくて源平の兵、宇治川の南北の岸に打臨み……

地は隙さず受けシットリと強く謡ふ。

くつばみを揃へ川水に……

シテは相替らず腰掛けながら文句に合せて仕形をなす、足拍子を以て騎馬武者の川水に入りたる形容をなし、さし廻して群鳥の群れ居る樣を見せ、羽音も斯くやは又足拍子にて形容し、ざつ〳〵とは兩手にて打入る仕舞をするなど是れ又見所聞所にて、忠綱兵を下知して曰より以下も足拍子と仕形にて其の模樣を形容し、我ながら踏もためずより立ち、半町計りと後へシザリ太刀を拔て奮戰の狀を示す。クセより爰迄は頼政獨特の形所にて謠も形も實に注意すべき難關なり。氣を換へ一段靜りてシットリと。

去程に入亂れ我も〳〵と戰へば

普通はロンギよりは一段と浮き立つが例なるに、爰は之れに反して靜ることゝなる。是れ老武者の最後といふ自然の結果にて、是れ迄と思ひてにて、太刀を捨てゝ扇を持ち、前へ出て、扇を前へ置き、更に是れを取り疊みて短刀に代へシツタリと身構る迄ジリ〳〵と次第に鎭る。

氣を換へ、張りて太く。

埋木の花咲ことも無りしに、みのなる果は

シツクリと居り合ひ置きて輕く。

哀れなりけり

と渡し、地は隙さず受けて引立ちて謠ふ。

跡弔ひ給へ御僧よ……

ワキヘアシラヒてシテは假初めながらと立ちて右へ廻り前へ進み出で、扇の芝とさし示して其の在所を確めながら、立歸りさまに後へ捨つる扇は自づと其の芝の形となりて殘り、シテは幻の如く姿は消えて終曲となる。シテ去り、ワキ去り、囃子方去り、扇は取り入られても尙目前の扇の芝の明々と見ゆる心地せらる。謠としても形としても、他に類例なき一種の趣きあるは、頼政其人の性格の然らしむるものか。

楊貴妃

シテ……楊貴妃　ワキ……方士
處……唐土

世に名高き美人を更に仙界に導きて一切の不淨を拂ひ、之れを方士に訪はしめて、玄宗皇帝の愛の高きを示し、飾るに蓬來宮の美觀を以てし、說くに昔の情事を以てす、艶麗の曲として此の上に出るものあらざるべし、莊嚴華麗の內にシットリと情を含めるもの此の曲の本色ならんか。

囃子方着座後宮の作り物に引廻しを掛けシテ入りて出、大小前へ据ゑる、流義によりては此宮は八棟作りとす、寶生流の小書に玉簾といふあり、鬘帶を以て作り物の周圍を飾ることありといふ、嘗て大阪にて平瀨某氏の楊貴妃を見たる時、作り物の四方に青、紫、黃等の色絹を垂らして美しく飾りたることあり、其後金剛流に何か小書あり斯くのことあるやを確めしに無しとなり、平瀨氏の好より出しものなりしか、此作り物などは隨分思ひ切つて飾りても此能の調和を缺く憂ひはあらざるべきに。何故に玉簾の外に此類のあらざるか。

次第にてワキ出る、ワキは厚板、大口、側次、腰帶、扇にて昔は頭に婆娑羅本結を掛けしも、今は散髮なれば用ゐず、嘗て京都にて猩々のワキの、唐冠の小形樣なるを頂けるを見たることあり、是れ等は至極良い思ひ付なり、散髮頭に對する處置は、明治能樂に就ての一つの改良事項ならん、當局者の一考ありたきものなり、舞臺に入り、優美にしてシツカリと謠ふ。

我また知らぬ東雲の、〳〵、道を何所と尋ねん

地取りに正面へ直し、鷹揚に名宣る。

是は唐土玄宗皇帝に仕へ申す方士にて候……

悠々と美しく道行を謠ふ。

尋ね行く如もかがなつてにても……

道行と着ゼリフ形の如く濟みて後、間狂言に太眞殿を敎へらるゝことあり、作り物の方に向ひ進みて、作り物を見伸びやかに、美しく謠ふ、ワキ方として大切の謠所なり。

有りし敎に隨つて蓬來宮に來て見れば……

事の由をも伺はやと存候と謠ひ終りワキ座へ行て待つ、シテは作り物の內より、伸々と優美に謠ひ出す。

昔は驪山の春の園に、共に詠めし花の色……

流義によりては此サシの前に「あらものすごの宮中やな」と彼の經政や芭蕉の如く下音より謠ひ返す文句の加はることあり、其の場合には、其部分は物寂びて靜かに謠ひ、氣を換へて昔は驪山のと謠ひ出すなり。

シテは面は增、小面、孫次郎等若き美しき女、緋大口に箔の着付、唐織を坪折にし、作り物の內に腰を掛くる。

ワキはシテの謠の終りより作り物に向ひシッカリと。

唐の天子の勅の使、方士是まで參りたり、王妃は內にましますか

シテはどこ迄も優美に伸々と。

何唐帝の使とは、何しに是まで來れるぞと……

互ひに謠ひ進み、同吟にてシッポリと地へ渡し、地はシックリと受けて靜かに美しく、いかにも梨の花の雨に濕ひし如く青柳の綠を添へて未だ葉の伸びざる時の如く、楊貴妃の姿の麗しき趣きを謠ひ浮ましむ。

梨花一枝雨を帶びたる裝ひの……

ワキはシテに向ひ謹み平伏してシッカリと。

いかに申上げ候、扨も后宮世にまし〳〵し時だにも……

シテはいかにも感に打れたる如き心持にてシッポリと。

實々汝が申如く、今は甲斐なき身の露の……

一旦沈みし場を引立つる心持にて。

扨しもあるべき事なれば……

シテも靜かながら成程と氣付し如くキッパリと。

是こそありし形見よとて、玉の簪取出し方士に與へたひければ

爰にて後見人天冠を持出してシテに渡し、シテは是をワキに渡す、ワキは是れを受取りながらキッパリと。

肆とよ是は世の中に、類ひあるべき物なれば……

シテは靜かに美しく。

實々是は理りなり、思ひぞ出る我も又……

シッポリと地へ渡し、地はシックリと受けて、美しく。

天にあらば願ひくは、比翼の鳥とならん……

シテのしほると共にシッポリと鎮めて据ゑ、打切にて氣を換へ伸々と麗しく。

されば共世の中の……

打切にて氣を換へ、脇丈けにサラリながら美しく。

さらばと言ひて出船の……

シテは靜かながら晴れやかに。

我は又何中々に三重の帶……

地は麗しく。

實や驪山の宮の内……

又取かざし、とワキより天冠を受取り、是れより起ち作り物を出づる、一時は人間界の昔を思ひ出て憂ひに沈みたりしも、何時となく仙界に還りて、爰に夜遊の興に入る、麗かに謠ひ切る後を受け、地はシッポリと美しく。

そよや霓裳羽衣の曲、〳〵、そゞろにぬるゝ秋かな

楊貴妃

地取より、物着となり、シテは後見座にて天冠を被り、更に立ち出て、伸びやかに美しく。

何事も夢　幻の戯れや
地も華やかに伸々と。
哀　胡蝶の舞ならん

爰にてイロエとなり、打上の後クリ地にてシテは大小前に立ち、クリ、サシ例の如く曲舞に移る、爰は過し昔を語ることゝなる故に、自然人間界に還りて愁を含み、クセはシツポリと靜かなり。

序の舞常の如く濟みて、上羽より乘込左右となり、ワキへ對して靜に謠ふ。

懸しき昔の物語
返しより後見座へクツロギ、天冠を脱ぎて持ち出で印のかんざし、とワキへ渡し、ツキは是れを受取り、恭しく暇乞ひして立ち去るを入り遠て遙かに見送り、靜かに。

去るにても〳〵、
扇を開きワキを招くこと二つ程あり、蓬が島つ鳥、よりさして角へ出て戀しや昔、としほり左廻りして作り物へ入り廻り扇を左へ取りて頭へ當て正面向に安坐して止めとなる、仙女も亦愛着の心を離る能はず、美しき内に憂を含める樣は誠に海棠の雨にうるほひし姿とや言はまし。

東岸居士

シテ　東岸居士　**ワキ**…男　**處**…京都

喝鼓ものゝ一なり、喝鼓ものは能の内にても一種別格のものにて、形を主として組立てられしもの多し、此の能は一遍上人の法語を主文として、人世悟道を諭すと同時に、東岸居士といへる異樣の僧を捕へ來りて、狂言綺語を以て世人を導かしむる手段に舞をまはし、喝鼓を打たしむることゝせり、ワキは總て主人公たる

シテの働きを補助せしむる爲めに設けられし役なる事勿論なれ共、此のワキの如きは就中唯シテの働きを誘ひ出し又は之れを補ふ丈けのものたるに過ぎず、酒脫磊落の内に幽玄の趣きを含めること此の能の趣きならめ。

先づ素袍の上下を着したる男のワキ一人出て名のる。遠國より出でたる都見物のものにて何事にても珍らしき事を見聞きし樂しむといふ風雅人なり、位取らざる内に何所となく超脫したる風を備へざる可らざるは、東岸居士といふ一種異樣なる僧と相對しての調和を計らざる可らざればなり、重からずして輕んず可らざる役なり、スカリと出て輕々しから樣に名のる。

是は遠國方の者にて候、我此程は都に上り、彼方此方を一見仕りて候、又今日は清水寺へ參らばやと存候

名宣濟みて脇座に行き坐す。

一聲にてシテ出づる、シテは喝食、喝食髮、唐織、大口、紫水衣、腰帶、掛絡の裝にて水晶の珠數と扇を持つ、舞臺に入り、脫俗したる心持にて伸々と謠ふ。

松をさへ、皆櫻水に散りなして、花に聲ある嵐かな

ワキは此の謠を聞き、シテを見掛けて立ちて詞をかくる。

是は承り及びたる東岸居士にて渡り候か、扨今日は如何樣なる聽聞の御座候

ワキは遠國の者なれ共、既に東岸居士の事は熟知し居りて、其の法話を聽聞せんものとて問掛くるなり、風流の通人にて戸惑ひする田舍者と同一視すべからず、シテは何處迄も正面より受け答へせず、洒落に受け流して。

事新しき問事かな、聽問といつば萬事は皆目前の境界なれば、柳は綠花は紅あら面白の春の景色やな

ワキは既に興に入りて。

あら面白の答や候、扨此橋は如何なる人の架たまひて候ぞ

シテは既にワキの我が手中に入るを見て正面より答て勸進を持ちかくる。

是は先師自然居士の、法界無縁の功力を以て、渡し給ひし橋なれば、今又かやうに勸むるなり

爰より鼓はアシラヒを打出し謠もノリて氣を掛け謠ひ進むなり。

扨々東岸西岸居士の、郷里は何處如何なる人の、父母を離れし御出家ぞや

シテはシックリと受けながら、次第に氣を掛けて謠ひ進み、ワキは亦隙さず之れに伴れて謠ひ進み漸次に互ひの呼吸詰みて地へ渡し、地は隙さず受けて威ひよくシッカリと謠ふ。

東岸西岸の柳の、髪は長く亂るゝとも……

シテは東岸西岸より出て開き、開くる法より左廻り、勸めに入りつゝとワキへ向ひて止める形あり、爰迄にて東岸居士とは如何樣なる人なるかを説明して一段落をなし、次のワキの詞より起りて舞の段となる。

又いつもの如く謠ふて御聞かせ候へ

法話をなす前に先づ舞をまひて人を集むる手段とす、是れ狂言綺語を以て眞の道を人に知らしむる方便なれば、ワキへの答への如くにして其の故を明かにす。

實に是も狂言綺語を以て、讃佛轉法輪の眞の道にも入るなれば、いざや謠ばん是とても

舞にかゝる序歌として地にて次第を謠ふ、シテは此所にて出て開き、地取りにクッロ。

御法の舟のみなれ棹、こゝ、皆かの岸に至らん

シテは出で伸々と謠ひ出す。

面白や、是も胡蝶の夢のうち

地は受けて麗しく謠ひ中の舞にかゝる。

遊び戯れ舞とかや

舞終りてより此の曲の主文たる法話に取り掛る、是れをクリ、サシ、クセと謠曲主要部の定規に當てはめ、シテはクセ舞をまふ、クセ舞は常の如くにして別段の意味あるにあらず。

鈔に又申さく。あらゆる所の佛法の趣き……

右にて法話の一段を終りワキの所望によりて羯鼓の一段を產み起す。

とてもの事に羯鼓を打て御見せ候へ

シテは後見坐にクツロギ掛絡を取り羯鼓を着て出て、勇ましく氣も晴々と謠ふ。

面白や松吹風さつ〳〵として涙の聲ばう〳〵たり

ワキも威よくサラリと謠ふ。

所は名におふ洛陽の、詠も近き白川の

白川の浪と鼓の音と松の風とザヽラとを對照して羯鼓を打つ前提とし、シテワキの掛合にて勇ましく謠ひ進みて羯鼓の段となる。

涙の鼓や風のさゝら……

羯鼓終りて此の能の働き場は爰に終りを告げ、古今集の古歌を引て和歌に謠ひ上げ、其の土地の白川を引き出して之れに前に出せる鼓とさゝらを取り合せ、音樂より歌舞

の菩薩へ落し合せて極樂に至らしめ、萬法皆一如と結びて此の曲の終りとす、爰ぞと別段に取立てゝいふ程の心持場所もあらざれ共、一種特別の謠ぶりありて凡手の能くすべきものにあらず。

海人

前シテ……蜑女　後シテ……龍女

子方……房前大臣　ワキ……從者　處……讃岐

此能は房前の大臣は讃州志渡の浦の蜑女の子なれば亡母の十三回忌追善の爲め志渡へ下られしに蜑女の亡靈顯れて其れとなく、古昔海中に沈みし珠をかづき上げしことを物語り遂に誠は御身の母なりと名宣り消え失せ、手厚き弔ひにより成佛して龍女となりて顯れ孝養と佛法の德を稱へて舞を奏するといふ筋なるが、能柄は一種風變りの仕組にて、女なれども三番目ものにあらず、玉の段を骨子とし

て働く模様は、狂ひものゝ位に似たれども本より狂女にもあらず、後半は當麻などと同じく早舞が主となりて神霊の方に近より半人半神ともいふべきであり、されば番組の順序にも多くは切に用ゐらるゝか又は初番に使はる、前半はシメヤカなる内に玉の段の活動あり、後半は勇しき間に早舞あり、體を働かして快感を呼ぶといふこと此の能の第一の主眼なるべけれども、他の物語の如くして暗に親子の情を示す所には深き餘情あり、謡としても大いに味ふべき所あり、普通の體を放れて一種の趣きを顯す、面白き作柄なり。

囃子方着座後次第の拍子に伴れて子方房前大臣を先に立てゝワキ出づる、子方は箔の着付に大口、長絹、金風折、ワキは段のしめ、素袍上下、ワキツレは無地のしめに同じく素袍上下、舞臺に入り向き合ひて、威ひよくシッカリと次第を謡ふ。

出づるぞ名殘二日月の、〳〵、都の西に急がん

地取りにワキ以下は坐し、子方は正面へ直し勇ましくサラリと名宣る。

房前の大臣とは我事なり、さても自からが御母は……

ならはぬ」と、謡ひながらワキ以下は立ちて子方も以前の如く向き合ひ勇ましく道行を謡ひ、例の如く着セリフありて後、子方は脇坐に行きて腰桶に掛り、ワキツレ子方に續いて坐し、ワキは地謡座の前に坐す、一聲にてシテ出づる。

シテは面曲見、鬘、同帶、箔又はのしめの着付、厚板の腰卷、白又は薄色の水衣の肩とり、扇をさし、右に鎌、左に海和布(松又は杉の葉にて作る)を持ちて出で、舞臺に入り、靜かに滯らぬ樣に何となく常人ならぬ樣に謡ふ。

蜑の刈る、藻に住む虫にあらねども、我から濡す袖かな

氣を換へサラリと騷がしからず。

是は讃州志渡の浦、寺近けれども心なき、あまのゝ里の海人にて候

海人にて候、と氣を入れシッポリと折れ合ひ、更に氣を換へサラリと。

げにや名にあふ伊勢をの海人は夕波の……

何を見るめ刈らうよ、とシックリ鎭めて打切となり、爰に位を定めシットリと拍子にかゝりて謠ふ。

刈らでもはこぶ濱川の

ワキはシテの謠の終るを待て威ひよく。

いかに是なる女、おことは此浦の海人にて有か

シテはシックリと。

さん候　此浦のかづきの海人にて候

ワキは命令する如く威ひよく。

かづきの海人あらば、あの水底のみるめを刈りて參らせ候へ

シテは憐むが如く蔑むが如く冷やかに。

いたはしや旅つかれ、飢にのぞませ給ふかや……

みるめ召れ候へ、とシックラ押へて置て氣を換へザクリと。

刈るまでもなし此みるめ召され候へ

意外の答へに驚きたるワキは、辯解する如く、諭すが如く更に命令す。

いや〳〵さやうの爲にてはなし、あの水底の月を御覽ずるに、みるめ繁りて障りとなれば、刈り除よとの御諚なり

さては左樣の譯でござつたかと覺りし如くなる蜃女は反つて我身の正體を顯すべき前提として、昔もさる例ありと明珠の此の海中にて失せしことを語り、そ知らぬふりしていでや海和布を刈りに海中へ入らんと其の準備にかゝる心持にて威ひよく「かづきあげしも此浦の」と地へ渡す、地は隙さず受けてシッカリと次第を謠ふ。

あまみつ月も滿潮の、〳〵、みるめをいざや刈らうよ

シテは一旦後見座にクツロギ、手に持ちし海和布を捨て鎌を右手に持ち、地取りの終りにいざや海中に飛び入らんとシテ柱の前へ進み出づるを、ワキは急いで之れを呼び止む。

暫、何と明珠をかゞき上げしも此浦の海人にてあると申すか

何となく茫然と顯はれし海士と房前の大臣とは觀月の妨げなれば海中の海和布を刈れよと命ぜしより交渉が始り、爰にて一段の歩を進めて双方の間隔を近づかしむ。シテは何氣なき體にて昔語りをなす、心中に期する所あるは勿論なり。

さん候、此浦の海人にて候、又あれなる里なばあまのゝ里と申て……

シテワキの問答は次第に進みて、遂に房前大臣の身上に迄及ぶ、最前より樣子を窺つてありし大臣は居たゝまらずなりて自ら詞を發して、尙も詳しく其の蜑女のことを聞かんとす、親子の情は愈々接近して事の眞相の露出も近からんとす、子方は隙さずサラリと。

やあ是れ、こそ屋前の大臣よ、あらなつかしの蜑人や、なほ〳〵詳り候へ

シテは待まうけたる事ながら、尙知らぬふりして。

あら何ともなや、今までは餘所事とこそ思ひつるに、さては御身の上にて候ひけるぞや、あら便なや候

大臣は親を懷ふの情の切にして包むに暇なく、淡泊に我身の蜑女の子なりしことを知りし次第を打明して語り給ふ、可愛らしく麗しく。

みづから大臣の御子と生れ、惠み開けし藤の門、されども心にかゝる事は、此身殘りて母知らず氣を換へサラリと可憐に。

或時傍臣語りて曰、忝くも御母は……

聞き入りしシテは情に堪へざる如くシッポリと。

よしそれとても帚木に

よしそれとても帚木に

地もシックリ受けて靜かに。

打切にて氣を換へ靜かながら引立ちて。

思へば尋れ來りたり、あら懷しの海人やと、御涙を流し給へば

シテは內に包む切なる情を押へてシッポリとやさしく。

げに心なき海士衣

地は隙さず受け、うるはしき内に情を含みて。

さらでもぬらす我袖を、重てしをれとや、叢けなの御事や

シツポリと鎮めて、内に包める情より湧く涙を拂ひ、打切にて氣を換へ、靜かに輕くシメヤカに次を謠ふ。

かゝる貴人の、賤しき海人の胎内に、やどり給ふも一世ならず……

餘所事のごとくにして母子の情の切なる趣きを示す所僅かの間ながら、注意すべき聞所なるべし。

ワキは未だ深く氣に止めず、昔語を聞きたさに、ムザと其の時の樣を仕形して見せよと所望す。

「とても事に彼玉を潜きあげし所を、御前にて學うで御目にかけ候へ

更に一段の歩を進めて愈々玉の段となる、爰まで進むに三段の區別あり、先づ海私布を刈れよと命じて何氣なく昔も左樣の事もありしと語り出す所が一段にて之れを序とし、大臣が我れこそ房崎の大臣よと名宣しより其の昔を語るが二段にて之れを破とし、其の樣を學うで御目にかけよと言はれ、愈々學ぶ所が三段で之れを急とす、此の親子を接近せしむるに序破急の三段法を以てし、次第に歩を進めて遂に包み切れず、「我れこそ御身の母」と名宣に至らしめし、作者の手腕は實に巧妙なるものにて敬服せざるを得ず。

玉の段は威ひよくサラリと謠ふ内にも、亦序破急の別ありて變化あり、かの海底より、取りえんことは不定なりまでは序にして淳朴にサラリと謠ひ、かくて龍宮に至りてより涙ぐみて立ちしが迄は破にして情も籠つて婉曲となり、又思ひ切りてよりは急となりて威ひよく謠ふ、此玉の段こそ此曲中第一の要所にて形もあり變化もあり最も注意すべき見所聞所なり。

波瀾をさまりて船中へ引上げられし海人は、いと沈める趣きにて靜かに。

かくて浮みは出でたれども……

線香の煙りの元に茫然と人影の在るが如くボッとしたる間に物語りは進行して、是れこそ御身の母蜑人の幽霊よと、名宣かと思へば、唯一片の手簡を殘したるのみにて、波の底に沈みけりと中入りとなる三段法を以つて次第に母子を接近せしめ、愈々事迫りて玉の段の活動となり、玉は知らず蜑人は海上に浮び出たりとをさまりて次第に幽冥界に變じ、茫々たる夢の内に中入となる趣向は味へば味ふ程面白き仕組なり、此變化の妙を考へ合せて謡も能も見れば海人といふ能は實に類の少ないものといふことも分る、謡も能も吟味すれば吟味する程面白味の増すものなれば、須らく十分に研究して其の眞價を味ふべし、中入中にワキは所の者を呼び出し、大法會を營まるゝにより一七日が間は浦々の網をもあげさせて殺生禁制とし又管絃の役者をも呼び寄せよなど命ずることあり、其れよりワキの言上によりて大臣は亡母の遺されし手簡を讀上ぐる。

さては亡母の手跡かと開きて見れば

待謡例の通り終りて出端となり、シテは黒垂れの上に龍を頂き、泥眼の面を掛け、箔着付、緋大口、舞衣扇にて左手に經卷を持ち出る、シテの出を見かけて地より「寂寞無人聲」と謡ひかけ、シテは舞臺に入り神々しくサラリと謡ふ。

あら有がたの御弔ひやな……

地も威ひよく丈夫に謡ひ、双方呼吸を拔かず謡ひ進み、あら有がたの御經やな、と後へシザリ經を頂き、イロエとなりて經を子方に渡し、海人に限り泣がかりと稱して舞のまへにシヲル形あり、其れより早舞となりて、神々しく勇ましく終局となる、後半は成佛して龍女と化せし蜑人の神靈が、莊嚴なる裝ひをなして姿勢の美を見するのが要點で別に深い意味はない、舞は總て目に姿勢の美を見、耳に拍子の調和の妙を聞きて、心に美感を與ふるものである。

大社

前シテ：官人　ツレ……同上　後シテ：神霊
ツレ……天女　同……龍神　ワキ……臣下
處……出雲

脇能は静粛荘厳を主として能樂の本體なれ共、近時嗜好者の趣味は、とかく幽玄哀傷の部に傾き、斯の如き能柄を好まざる風なれば、諸所の催能にも出づること稀れなるが、去十一月十三日喜多舞臺に於ける改築祝能の時に出て之れを參觀し、其の構造の壯大にして而も威嚴に富み、神國勇武の氣象は、全く此の莊嚴雄大の内より生れ、近時國威の發展の偶然にあらざるを思はしめぬ、元來脇能は高砂を元として、積極消極の二方面に發達せのもの丶如く、此大社の如きは積極の内にも最も壯大を示せる一つにして、シテの裝ひといひ、作り物の構造といひ、

ツレの出立、仕形の配置、囃子の組立、一つとして莊嚴ならざるなし、嘗て佛國人ノエルベリー氏は、寢覺の能を見て深く歎稱し、斯る結構なる能のあるに、何故屢々演せられざるかと不審せしことあり、今回此の大社の能を見て、外人の美術思想に富み、能を見る眼の凡ならざるを確めたり。

由來日本人の頭には、觀劇に就ては歌舞伎が先入主となれる故に、能を見るにも先づ其の筋をたどらんとして其の趣味を解せざるもの多し、能樂は恰も活ける繪畫の如く、姿勢の美は最も注目すべき要點にして、動作に至りても、一擧一投足の意味よりも大體の趣きを主とす、謠の文句も拍子の緩急も、總て理窟に拘泥せずして、其の模樣を示すに重きを置けり、風景を賞し、繪畫を愛するの眼より見れば、美しき裝ひせる繪畫が活きて動き、説明と音樂を加味せる風景の活きて浮み出ると同樣なれば、動かざる繪畫、靜止せる風景よりも、優りて其美と面白味を感ぜねばならぬ道理なり。

脇能は前半に於て靜粛の内に神々しき趣きを見せ、後半に於て嚴粛なる内に莊嚴の樣を示せること全般に通じての定例なるが、大社の如きは其最も廣大に擴張されし一つにて、前は最も嚴粛に、後は最も莊嚴に、積極的に脇能の趣きを發揮せるものといふべきならんか。

囃子方着坐後、大小前へ一疊臺を二つ並べ、引廻しを掛けたる作り物を出し、次第にて大臣ワキ三人出づる、早め頭にて勇ましく勢ひ附ける拍子に伴れ强く謠ふ。

誓あまたの神祭、〳〵、出雲の國を尋れん

地取りあり三段返しに謠ひ返して、勢ひよく勇ましく名宣る。

抑〳〵是は當今に仕へ奉る臣下なり……

道行も例の如く謠ひ、着セリフの後ワキ座に至り坐す。

眞の一聲にて、シテ(尉)及ツレ(男)出づる靜め頭にて篤と鎭れる位を持し、橋掛りにてシットリと神々しく謠ひ出す、ワキの出にて强く勇ましく、シテの後にて靜に神

神しく、此の緩急の對照こそ脇能の特長なり。

シテは高砂と同じく、面小尉、尉髮、小格子、大口、水衣(肩上げ)、腰帶、扇さし、杉帚をかたぐ、ツレ男、直面、熨斗目、水衣(肩上げず)、腰帶、扇持、シットリと靜かに。

八雲たつ、出雲八重垣妻こめし、宮路にはこぶ、歩かな

ツレは正面へ向ひ、破の位にてキッパリと。

尾上の松の檜まで

神風さそふ、聲ならん

双方向き合ひながらシットリと。

是れより舞臺に入りツレは大小前へ、シテはシテ柱前常坐へ立つ事例の如く、シテは位を持しながらサラリと。

實や濁世の人間と、生れ來ぬれど誓ひある

向き合ひながら、居合て障らぬ樣に。
神に仕ふる身にしあれば……
下歌でシットリと滯らず、上歌で張りて伸々と謠ひ、上歌の末に入替ること例の如し、ワキは之れを見掛け起ち、シテに向ひて威ひよく。
我出雲國大社に參り……
シテはドッシリと受けて。
是は此邊りにては見馴申さぬ御事也……
互ひに謠ひ進みて瀟よく地へ渡し、地は隙さず受けて勢ひよく。
神の世を思ひ出雲の宮柱……
返しより出て開き、左り廻りの後更に開き、ワキに對して坐すること例の如く、クリ、サシ、クセと順次に其れ〴〵の位を持ちて謠ふ、シテは坐したるまゝ心付常例、ロンギも坐したるまゝに謠ひ、地の「白木綿かゝる」より立ち、一寸クッログ氣味にて更に立出ててワキを卷さし「社壇に入にけり」と開きて作り物の内へ中入ゝ、爰尋常ならぬ模樣を示して中入するに付、囃子方は來序を打つ、ツレ男幕に入ると拍子變り、間の末社の神出づる、此間には神子神主と稱する小書あり、此場合には先づ神主出でて神有月の謂れを語りて後、神子を呼び出して鈴神樂を上げしめ、神主は鼓を打つことあり、此小書となると囃子方のアシラヒに相違あり、小鼓は神主の打つ手に合せて囃することゝなる。
出羽にて天女出づるを見て、麗はしく勇ましく謠ひ掛くる。
しぐるゝ空も雲晴て、月も輝く玉の御殿に、光を添ふる景色かな
天女は舞臺に入りてサラリと麗はしく。
我は是れ、出雲の御崎に跡を垂れ
太鼓の頭を聞て地は麗はしく謠ふ。
容顏美麗の女體の神……

返しより出て開き、長絹の露を取りて廻り、達拜して天女の舞となる。
舞終つて後も太鼓の頭にて位を定め、地は麗はしく謠ふ。

實類ひなき舞の袖……

天女は此謠の間に左右打込開き、返しより出で「諸神は殘らず顯れ給ひ」とさし廻して諸神影向の樣を示し、「早疾く姿を顯はし給へ」と作り物の方に向ひて坐し「夕の月も」と立ちて脇の上座に坐す、天女の動作終り、シテの出顯となる所より謠の位も靜り重々しくなる、「神體顯はれおはします」と引廻しを取れば、面鷲鼻惡尉、烏甲、白垂、色鉢卷、厚板（色入）半切、狩衣、腰帶の裝ひせるシテ端然と腰桶に掛り居る。

ドッシリとせる位にて地は謠ふ。

實や貴き御相好……

神靈威光の樣を謠ふものにて、シテは腰桶にかゝりながら堂々と謠ふ。

とても夜遊の神祭……

次第に位靜り「返す〴〵も面白や」とシテの樂となる。樂終りて、靜ながら引立ちて地は威ひよく謠ふ。

舞樂も今は時過て……

シテは堂々と左右打込開き、返しより出「更行く空」と開き、「沖より」とさし廻して海の面洋々たる趣きを見せ「海龍王の出現かや」とかざして見渡し、再び作り物の內へ入る、謠は龍神の出現より勢ひを替へ、沖より龍神、より早く進む。

早笛にて金の箱を持ちたる龍神出で、橋掛りにて威ひよく名宣る。

押　是は海中に住んで衆生を守る、海龍王とは我事なり……

太鼓の頭に伴れ、威ひよく勇ましくサラリと謠ふ。

龍神則顯れて……

龍神は足拍子を踏み、返しより舞臺に入り、持てる箱をシテの前に置き、左へ飛び廻り臥して禮拜し、「御箱の蓋を」と進み行きて箱の蓋を開けば、中には龍の入れあり、

是れを捧げてシテの前に進み、臺を飛下り、打杖を抜き持ち、活動して舞働きとなる、舞働き終りて笛座の前へ坐す。

舞働きの後は位靜りて、ドツシリとシテの謠となる。

四海安全に國治り……

地もシツカリと謠ひ進む內に「數々の神も」天女は立ちて橋掛りへ行き、「龍神は平地」と謠の位進むと共に龍神は立上り、文句に合せての活動ありて後橋掛りへ行き、「諸神は虛空に」と謠ひ靜ると共にシテは立ちて作り物より出で、双方の袖を卷上げ、神々しき威儀を示し、シテ柱の本に行き、袖を下し留めとなる、此の終局の場合は天女も橋掛りの三の松の所に在り、三人共に留るもあれば、天女は先へ幕へ入り、シテと龍神丈けにて止むるもあり、海陸相應じての神靈の活動、夢覺めて尙ほ感應肝に銘する心地せらる。

八島

前シテ……老翁　ツレ……男　後シテ……義經靈
ワキ……旅僧　處……讃岐

此曲は讃岐國八島に於ける源平の戰ひを骨子とし之れに配合するに同地の風景を以てしたるものにて行脚僧と義經の亡靈を借り來り先づ漁人を顯して幻に古昔の面影と土地の實景を示し一轉して夢裡に判官義經を出し修羅の戰ひに擬へて其の實戰の樣を寫せり。

脇は西國行脚の僧にて熨斗目水衣の普通僧、流義により一人もあれは三人脇もあり、出方に就ても、次第あるもあれば、名乘りのみもあり、次第のある方なれば次第の拍子に連れて出て舞臺に入りて次第を謠ふ。

月も南の海原や、〳〵、八島の浦を尋ねん

名乗りのみの分は囃子方坐付を見て、幕を開き出で、舞臺に入りて名乗る、囃子方は脇の出づるを見て床几に掛る順序となる、何れ共に名乗り濟めば囃子に打切を打ち（ヤ）當る間に當りて道行を謡ひ出す。

春霞　浮立つ涙の沖津船……そなたの空と行程に

と云ふ所に又打切あり。

遙々なりし舟路へて、八島の浦に着にけり

此所にて脇は道行と稱して、前へ數歩出で、又引返して本の座へ戻る、是れ舟にても又足力にても、其行動の模樣を示すものにて、假令千里を歩むも幾海里を走るも、唯數歩の往復を以て之れを代表す、是れ能樂の眞味の存する所にして、高尚優美の趣味も實に此の裡に包藏せらるゝなり、川柳に脇僧はそろ〳〵行きて急ぎ候、と云ふあり、彼の幕より出でて舞臺に立つ迄の間のそろ〳〵歩めるは、曲中の人たる爲めに顯れ出づるものにて、未だ道行の歩行にはあらず、都を出でて舟に乘り遙々の波濤を凌て八島の浦に着きにけりまでの行路の形容は、唯此の數歩の間に於て完成す、されば此の脇僧の舞臺に立ちて謡ふ所の春霞より着にけり迄の道行は、時候を顯し、景色を寫し、行路の難易を示し、途中の遠近を見す、其謡方の肝要なる推して知るべきなり、次第、道行、待謡は脇方に取りて最も必要の謡場所にて、此謡方によりて其能柄の位を定め、其趣味の深淺を分つ、其の巧拙は以て一曲の趣味に關す、脇方の責任も亦重しと云ふべし、彼の打切といへる拍子の如き、謡の切目に於て大小の鼓は一齊に（イヤア）と頭と云ふ甲の音を打ち、大鼓は其次へ（ハアオンヤア）と云ふ聲を掛け、小鼓之れに次で（ハア）（ハア）と甲乙の二音を打つ（流義により大小一齊に終始掛聲を同うするものあり）、或は唯徒に謡を中止し、時間を空費する如き感を爲す人もあるべけれ共、是れ實に必要なる拍子にて、是れに依りて其變化を示し位を定め、又立方は此間に動作を整ふの要あり、然るに當時の謡狂連の中には、此打切の一つをも辨へざる人ありて、早くも能樂通を氣取るあり、謡の流行日に〳〵盛んにして能樂の愈々

衰ふるも亦宜なりと云ふべし。

此の八島と云ふ能は、修羅物即ち二番物の中にても、朝長、實盛に次げるものにて頼政と肩を並べる位のもの、又勝修羅三番（田村、箙を入る）の内にて祝能に用ゐるもの故、引立ちて勇ましきは其特色なれ共、其位を失はざる注意も肝要なり、されば脇僧も行脚僧には相違なきも、能柄相當の位を存するの心掛け無かる可らず。

仕手の出は一聲なり、仕手は面三光尉、尉髪、熨斗目、水衣の出でたちに釣竿をかたげ漁翁兼鹽屋の主人、連は直面、放髪（當今は散髪）即ち男の形にて他は同様同じく漁夫にて従者なり、橋掛に立ち一聲の打上を聞きて謡ふ。

シテ「面白や月海上に浮んでは波濤夜火に似たり ツレ「漁翁夜西岸に遍ふて宿す 二人「曉湘水を汲んで楚竹を焚くも、今に知られて蘆火の影、ほの見えそむる物すごさよ（流義により面白さよ）

是れ兩漁夫の口を藉りて、風景を敍するもの、夕月の浪を照す様も見え、遙に篝火の光りを認め、薄暗き春の夕べ、月の光りにて海上も見え渡り、浪は月光によりてキラ〳〵と照り、漁夫の得たる魚を煮る爲めか又は魚を集めん爲めか舟の内にて焚く蘆火の影は、チラ〳〵と此所彼所に見え、面白くも又物すごき有様は此二人の謡にて顯さゞる可らず、仕手はズカリと謡ふ内にも自から位あり、連はサラリと謡ふ、仕手の位を助け、連吟に折合ひて謡ひつゝ互ひに向合ふ、シンミリと閑なる景色を寫し出す所此仕手の出の眼目ならん。

シテ「月の出潮の沖津浪 ツレ「靈の小船こがれ來て 二人「海人の呼聲里近し

此所にて又二人共に正面向き氣を換へハツキリと伸々と謡ひ、連吟にて又向合ふて折合ひ、此謡の終りより二人共に舞臺へ入る。

シテ「一葉蟲里の船の道唯一帆の風に任す ツレ「夕の空の雲の浪 二人「月の行衛に立きえて……

正面向きて面々に謡ひ連吟となりて向合ふは前例の通り、下歌、上歌は打切にて位を定め、其變化あるは例の通り、此所總て八島の浦の風景を叙して、漁翁出顯の趣きを示せり、此邊の形ち總て能く松風に似たり、然れ共彼れは秋の夕清麗なる須磨の浦

に海人乙女の幽霊、是は春の夕悽愴たる八島の古戰場に勇將の亡魂、彼れは三番物、是れは二番目、其の内容に差異ある勿論なれ共、外形に於て其趣きを一にす、輕んず可らさる事知るべきなり、宿を貸せ借さぬの問答は、松風、雨月、紅上等皆同筆法なれ共、宿を貸すに至る一段に至りては皆其因を異にす、是れ何れも其能柄により、又其位により各々特異の趣きを有す、其味ひ掬す可きなり。

シテ「何旅人は都の人と申すか……更ば御宿を貸し申さん……

大いに心持あり、是れより仕手と連との謠になり、仕手はシッカリ、連はサラリとの變化の内に次第に進み。

八島に立てる高松の苔の鑵は痛はしや

と地は丈夫に張りて取り打切にシットリと打合氣を替へて。

扨慰は浦の名の……我らも元はとて頓て涙に咽びけり

靜にシメヤカに昔を忍ぶ心の内、自から九郎判官義經の幽魂の來れる趣きを包含せしむ。

ワキ「いかに申候……

先づ問を設けて其骨子たる八島合戰の緒を引出す。

いで其頃は元暦元年三月十八日の事成しに……

流義により差異あれ共、此語の前に語つて聞すべしとの挨拶辭あり、此詞は所謂應答なれば輕く謠ひて語とは區別を明にすべし、此物語に至れば仕手は床几に掛り、(床几の無き時もあり)暗に源氏の大將の位を具へて語る。

一院の御使源氏の大將檢非違使五位の尉源の義經と名乘り給ひし御骨柄

と語り出でては氣焰萬丈氣宇天を呑むの概あり。

今の樣に思ひ出られて候

今昔の感轉た胸をさすの思ひならん。

其時平家の方よりも……

此の謡は流義により地と連の別あれ共何れ共にスッカリと運びよく謡ひ退け仕手に位を與ふる心掛肝要なり、次第々々に詰みて。

互ひにゑいやと引力に
と鋭く渡し地はスカサズ受けて勢ひよく。
鉢付の板より引きちぎつて左右へくわつとぞ退にける是を御覽じて義經
謡は運びよく仕手は床几の儘形あり。
御馬を汀に打よせ給へば……
より立ちて舞ふ。
あとは鯨波絶えて磯の浪松風計りの音さびしくぞ成りにける
と謡も静り仕手も坐す、打切にて氣を換へ。
不思議なりとよ海人よ……
論議となり。

其時は我が名や名乗らん
と形も謡も心持あり、ジリッと鎮り中入となる、總てロンギにて氣の換り、地はサラリ、仕手は位を持ち、終りの地より次第に静り、物静かに優々と中入になるは通常の原則にて、見る者聞く者能く此變化を味ふべきなり。

中入の時上掛りにては連男はシテに從ひて退場すれ共下掛りにては其儘居殘り居れり、幽霊の居殘りとは隨分變な感じもすれ共、後の物語の所にて、仕手との掛合は、地謡にて謡ふよりは、連にて謡ふ方折合よき樣なり、何れにしても一長一短にて、又何れなりとも苦しかるまじ。

中入の間語りは普通の分にても、幾干か風變り趣きありて面白し、奈須の語り其他替りの間となれば、狂言方にては頗る重き習ひとなる。

間狂言の語り濟みて脇の謡ふ謡を待謡と云ふ、待謡は多くは、松風が吹しとか、浪音が閑かだとか、月澄上るとか、其地の風景模樣を叙し終りは夢の枕に伏にけりと云

ふ類が多く、仕手の出の拍子を誘ひ出す丈けの働きを爲すものなれば、其位は仕手の出に打つ、出羽とか一聲とかの位に伴ふべきものにて、其謠方も氣のきゝたる謠方をせず、ボーと緩やかに物靜かに謠ふべき筈のものなり。

後仕手は面平太、梨子打、黑垂、白鉢巻、法被、半切、法被の肩を脱ぎ太刀を帶す る出立にて一聲にて出で多くは舞臺に入りコイ合にて謠ひ出す。

落花枝にかへらず……

サラリと勢ひよく謠ふべきなれ共、源太景李と判官義經との差は心得ざる可らず。

淺からざりし業因かな

とシリヽと折合ふ。

早曉にも成るやらんと……

夢幻の裡に眠れる僧も、目前に武將の顯れたるを見て、夢中にも尙ほ醒めたる心地、ハテ不思議やとの心持、氣を掛けてスカリと謠ふ。

我義經が幽靈なるが……

堂々と鷹揚に謠ふ內にもシッカリと勇ましく。

掛合中次第に運びよく氣を掛け。

忘れ得ぬ

とシッカリ渡し。

武士の八島にいるや槻弓の……

ズカリと勢ひよく掛り打切にて丈夫に据ゑ、其あとも運びよく。

夢物語り申也

と折れ合ひ氣を換へて伸び〳〵と勢ひよく。

忘れぬ物を圖浮の古郷に

とクリに掛る。

思ひで出づる昔の春

サシは例のサラリ、仕手と連又は地謠との交る〳〵謠ふ所に至りては總て位はサラリの中にも、仕手には位あり、地又は連の謠は更にサラリ。

判官之れを聞召、辭とよ弓を惜しむにあらず

ジリ〻としめて曲に掛る準備をなす。

義經源平に弓矢を取って私なし

曲には何れとも必ず序破急の心得あり、此曲は勝修羅故、勇ましくサラリの心持なれ共、其内にも此の緩急の心得は忘る可らず。

智者は惑はず

是れ曲の上げにて一際引立ちて謠ふ、曲の終りは例によって少しく締めて折合ふ。

形の方はクリの巓より床几に掛り、曲の上げより立つて舞ふこと〻なれ共、唯文句柄に合せたる普通のことにて特に注意を要する程のことなし、謠の心持こそ肝要なれ。

又修羅道の鯨波、矢叫びの音震動せり

引立ちて勢ひよく〳〵カケリに掛る、カケリは修羅物、狂女ものなどに附隨するものにて、勢ひ鋭どく緩急ある調子にて、物に狂ふ樣又は戰ふ樣などを形容する趣味を發揮するものなり。

今日の修羅の敵は誰そ……

昔の妄執にひかる〻修羅の戰ひ、物すさまじくも又勢ひよく、謠も囃も共にシッカリと鋭き心持なるべし。

春の夜の淚よりあけて……

此に始めて旅僧の夢も醒め、八島の浦の風景に立戻れども、朝嵐しの尙烈しき心地何所迄も勢ひはゆるみなく曲を終るべし。

砧

前シテ：妻女　ツレ：夕霧　後シテ：妻女ノ亡靈

ワキ……蘆屋何某　**處**……筑前

砧といふ能は各流通じて重き能となす、いかにも重き能なり、誠に難かしき能なり、見ても重き能と受取られ、謡つても難かしきものと感ずる、何故に此の能は重きか、何の爲めに此の謡は謡ひ難きか、別段難かしき節があるにもあらねば、是といふ舞の手があるでも無し、難かしき節もなく別段の形もなき能の難かしき謂れさへ判れば此の砧といふ能の性質も明瞭となる譯なり。

此の能の筋は蘆屋の何某と言はるゝ紳士の妻、長き孤閨の鬱悶をやらんものとて、都よりの夫の使にとて來りし女と共に、秋の夜中砧を打ちしに、其の響きと共に吹く夜嵐も、鳴く蟲の音も皆哀れを催す種となりて涙に浮く計りなりしが夫の歸りもまだ定かならずと聞き遂に思ひに堪へ兼て病に伏して空しくなりし後、其の夫歸り來りて之れを歎げき、亡き妻の爲めに法會を營みしに其の亡靈顯れ、冥途にて受くる責苦を訴へ長く捨て置かれし恨みをも述べしが遂に法華讀經の力にて成佛するといふことにて其の局を結べり、其の事實の有無は定かならねども其は本より問ふ所にあらず唯秋の夜中に響く砧の聲と戀慕に啼く可憐なる女の心情とを對照したる點こそ此の能の生命にて其の景情の趣きを表すこと實に此の能の難物として世に重ぜらるゝ所以ならめ。

先づワキは素袍上下の姿にて出で、紳士として恥かしからず砧といふ能柄に負ぬ樣堂々とシツクリと名宣る。

是は九州蘆屋の何某にて候……

ワキに從ひて出でしツレ夕霧は小面、鬘、同帶、箔の着付、唐織の着流の裝にてシテ柱の傍に坐してワキの呼出しを俟ち、ワキの故郷へ下るべしとの命令を聞き、やさしく重くれぬ樣に答ふ。

さらばやがて下り候ふべし、必ず此年の暮には御下りあらうずるにて候

ワキは悠々と幕に入りツレは殘りワキの入りて後常坐に立ちてうるはしく滯らぬ

樣に道行を謠ふ、熊野の朝顏に比敵すべきなれ共彼れは陽にして是れは陰なり春と秋との差は確に其の心持に存すべし。

此程の旅の衣の日も添ひて……

着セリフの後橋掛に向ひ案内を乞ふ。

いかに誰か御入り候　都より夕霧が參りたる由御申候へ

アシラヒにてシテ出づる、面曲見深井の類、鬘、同帶、箔の着付、唐織の着流し、橋掛にて内に思ひのある如く物哀れにシッポリと謠ふ。

夫れ鶯鶯の袞の下には立去る思を悲しみ比目の枕の上には波を隔つる憂あり……

夕霧は更に案内を乞ひ、シテは之れに答へて此方へ來れよと舞臺に入り地謠坐の前に坐し、ツレ後より入りて之れに對し坐す、流義によりてはシテ先づ入りて大小坐の前に坐しツレはシテ柱前の常坐に居るもあり、シテはシメヤカなる内に恨みある心持にてシッポリと。

いかに夕霧　珍らしながら恨めしや……

ツレは無邪氣に可愛らしく。

さん候　とくにも參り度は候ひつれども……

ツレの謠を遮り止むる心持にてキッパリとせる内に憂ひあり恨みある口調にて。

なに　都　住居を心の外とや……

伸々と大く麗はしき内に愁を含みて。

思ひやれ實には都の花ざかり……

シッポリと地へ渡し地はシックリ受けて靜かに謠ふ。

鄙の住居に秋の暮……

伸々と麗はしき内にシメヤカなる氣を含みて。

三年の秋の夢ならば……

フト物音を聞付たる樣にてキッと向ふを見て。

あら不思議や、何やらんあなたに當つて物音の聞え候

ツレへ向つて。

あれは何にて候ぞ

ツレはシテに對して。

あれは里人の砧打つ音にて候

シテは打沈める内にも心の少しく他に移りたる樣にて。

げにや我身の憂まゝに、古事の思ひ出でられて候ぞや……

ツレは慰め顏に。

いや砧などは賤しき者の業にてこそ候へ……

ツレの詞終りてシテは後見坐にクツロギて物着となり肩を脫ぎツレは立ちて地謠坐の上に行き後見人は砧を持ち出でて脇坐の前へ置く（流義によりては砧の作り物を出さゞるもあり）

シテは準備終ればシテ柱の前の常坐に立ち、サラリとサシを謠ふ。

いざ〳〵砧打んとて……

思ひをのぶる便りぞとよりシテも砧の前に行きツレ亦進み、打つとかや迄に兩人共作り物の前に坐し、地のシツポリと麗しく謠ふ次第に伴れて向き合ひ、地取りにシテはクツロギツレは元の坐に復す。

衣に落つる松の聲……

常坐に立ちて伸々と張りて謠ふ内にも何となくシメヤカなる趣きは失はれず。

音づれの稀れなる中の秋風に、地「聲を知らする夕べかな……

此所にイロエの入ることあれども無きを通常とす、流義によりては誰が夜と月はよも訪はじ、のあとにイロエの在るもあり。

此の邊りよりは少しく打興じたる心持となりてサラリと麗しく。

面白の折からやな……

憂を忘れて打興ずるといふ内にも唯娯樂より來るにはあらず、結ぼふる心を慰めんとて砧を打ち其の音に引かれ風景に浮かれて何となく狂じたる心地となれるものなれば、地謠も一段引立ち伸びやかにハコビて左の一段を謠ふ、此一段こそ此一曲中の花とも山ともいふべき要所にて最も聞所なり。

故郷の軒端の松も心せよ……

此所にはシテの形もあり形として最も見るべき所なれ共一種の曲舞の如きものにて深き意味あるにあらず、併しほろ〳〵はら〳〵の所にはシテとツレと立寄りて交々砧を打つ形あり其打方は口傳として最も重ぜらるゝ所なれ共、作り物を出さぬ流義にては本より其形なし喜多流の手附の一節を摘記すべし。

故郷のと正面向、返しより少し出、今の砧のと乘り、君かと東を見、餘りにと正面向出、其夢と開き、破れてと靜に右へ廻り、君が命と右の方向開き、月にはと見いざ〳〵とツレへ向、彼七夕と正面向出で、天の川浪と指廻し開き、二つの袖やと左右仕留、文月と上羽、八月九月と左右正面へ打込、しらせばやと開き、月の色と身をかへ高く見、風のけしきと右へ心付廻り、心すこと開き、砧の音と右へ乘り、蟲の音と下をさし角へ出、露涙と扇かざし下を見る、ほろ〳〵と左へ少し廻りシザリシホリ下に居る。

ツレはシテに向ひさも氣毒なる心持にて。

いかに申候、都より人の參りて候が、此年の暮にも御下りあるまじきにて候

シテもツレへ向ひ最も失望落膽せる心持にてシメヤカに。

恨めしやせめては年の暮をこそ……

地も低き調子にて最も靜かに。

思はじと思ふ心も弱るかな……

思ひに堪へ兼遂に病の床に伏す所を示すものにて正面へ直し安坐してシホル、風狂したるよりツレに送られて靜かに中入す、此の冷靜なる内に無量の力の籠る所老手を

俟つて始めて能くすべきことにて砧の能の重き所以も此の邊の模樣を見て思ひ半に過ぐるものあらん。

中入後ワキは素袍の上を取り掛絡をかけ佛門に入りし姿にて出で、世の無情を感せし心にてシツトリと待謠をうたふ、梓の弓のうらはずにの所には一種の謠方あり注意すべき聽所なり。

無慙やな三年過ぎぬる事を恨み……

シツトリと澁やかなる出羽にて後シテ出づる、淺女、鬘同帶、箔着付色大口、白練衣の坪折りにて扇をさし杖を持つ、大口を用ゐず、箔の腰卷、白水衣の肩上げにて出づるもあり、最も陰澁なる調子にて靜かに謠ふ。

三瀨川、沈みはてにしうたかたの……

此所に太鼓あれども太鼓も習物にてシツトリと靜かに打ち手數にも尋常ならざる所ありて、いかにも此の能柄の重き趣きをも思はしむ。

地謠となりては地獄の苦患の狀を叙する所なれ共かよわき女の疲せ衰へたる姿に對して本より荒々しく謠はれもせず、シツトリとせる內に苦患の趣きを含ます所最も心を入るゝ謠場所にてシツカリと澁ぶく謠ふ。

因果の妄執の思ひの涙……

此の地謠より形あり、砧といふ所にて砧を見る心持あり、胸の煙と胸に手を當て面を下げ、叫べど聲の出ばこそと面を直して苦き思入をなし、呵責と杖を持てシザリ杖を捨て安坐し、恐しやと兩手に耳を被ふなど文句に合せての形有て注意すべき見所なり。打切にて氣を換へシテも扇を持ての形となり謠も幾干か陽氣を帶び引立て謠ふ。

羊の歩み隙の駒……

前段は我が身の苦患を述べしものなりしが、此段となりては夫に向つて恨みを述ぶる所にて彼我の別あり從つて其の趣きに變化あるも自然の理なり、其の形に至りても前段は實感の所作多かりしが此段となりては舞ぶりのものとなり、あぢきなの浮世や

と扇を打合す所には一段落あり、シックリと沈着てシテの謡あり。

恨みは葛の葉の……

地は之れを受けて次第に氣を掛け垂れぬ樣に謡ひ進み、烏てふにて一段引立ちシッカリの内に次第に呼吸を詰め氣を掛けて謡ひ進み、思ひ知らずや恨めしやとワキの前へ迫りて泣き入る。

羊の歩みより此の恨めしや迄には「あぢきなの浮世や」と「そもかゝる人の心か」との所にて三段に分れ此三段各々序破急の心持あり、謡の内に生死の海とか、末の松山とか、蘇武は旅雁に文をつけとか所々に風景を聯想せしめる文句を挾みて其の趣きを添へ陰澁の氣を美化せる所實に能樂の特色にて形も亦之れに叶ひ身をかこち人を恨む心持を顯す間には左右、さし、開き、打込右廻り、左開き廻り、小廻り、足拍子など何の意味もなく、唯姿勢の美を示す爲めの擧動の多く用ゐられて居るのと對照して見ると能樂の面白味は泉の湧き出づる如く其の奥が知れぬことも判つて此の砧といふ謡の難かしい譯も知れて來る。

法華讀誦の力にて、より更に一轉化して恨も無くなれば苦しみも去り今迄の妄執に引かれし憔悴たる女は清淨無垢の女菩薩となり平穏靜粛なる謡にて靜かに此の曲を終る、人去り聲鎮りて、後も尙ほ遙に砧の音の聞ゆる心地ぞする。

烏頭（善知鳥）

前シテ……老翁　子……千代童　ツレ……女

後シテ……獵師亡靈　處……陸奥

陸奥外ケ濱の獵師現世にて殺生戒を破りし罪により死しての後地獄に落ち數々の苦を見るといふ筋合なれども是れは外ケ濱に住むといふ善知鳥といふ鳥を本として起りし傳説を假用し殺生戒の守らざる可らざるを諷せし丈けにて能樂としては地獄と亡者の物凄き趣きと數々苦を重ぬるといふ文句に連れての仕形の變化

を見すことが眼目にて所作能の一種に數ふべきものなり、技ぶりの美を以て鳴れる人々の演奏に適せる能柄なり。

囃子方座着きたる後、小兒と女房と出でて脇座に坐す、是れ世を去りし獵師と忘れ笹と未亡人にて、外ヶ濱に侘び住居せるものなり。

次でワキ僧一人出でて名乘る、是れ外ヶ濱を志して旅行中の僧にて、其途中越中國の立山に登り、地獄谷の樣をも一見すべき由を告ぐ、位は普通の旅僧にて別段の事なし、但其の旅行の目的丈けに何となく陰氣なる氣味ありてシッポリしたる名乘り振りなり。

是れは諸國一見の僧にて候……

此の僧何地に於て此の名乘りを爲せしかは定からね共詞の内に立山に登山したる事も知らる。

正面へ出で此の山にて地獄の樣を實見したる感慨を述ぶ、伸々とシッカリ謠ふ内に何となく物凄き趣きも含まるゝなり。

扨も我此立山に來て見れば……

浮世の樣を觀じて悟り顔に怎々謠ひつゝ立ちて廻りて行くは立山を下りて遙々外ヶ濱へと赴くものと見るべし。

慚愧の心時過ぎて山下にこそは下りけれ……

何心なく歩みつゝある僧を呼び掛くるものあり、峯を吹く松風か、谷を傳ふ谺か、人か、鬼か、物凄さ譬へん方なし、シックリと物凄くうたふ。

のうのうあれなる御僧に申すべき事の候……

心に賴む所ある僧は驚く氣色もなくサックリと。

何事にて候……

次第に近づくを見れば姿は正しく老人なれ共其樣すさまじくて此の世のものとも思はれず、沈みたる調子にて滯らぬやう。

陸奥へ御下り候はゞ言傳て申候べし……

不審ながらにもスッカリと。

是は思ひも寄らぬ事を承り候物かな……

相變らず沈みたる調子にて物ありげに。

實に慥かなるしるしなくてはかひあるまじ

少し考へる趣きにて。

や、思ひ出でたり有りし世の

伸びやかにシックリと謠ひながら水衣の片袖を引き切り僧に渡す。

いまはの時迄此の尉が……

伸々と物隣れにシックリと地はうたふ。

是れをしるしにと涙を添へて旅衣……

僧は衣を受取りて一方に立ち去れば、亡者は見送りさめ〴〵と泣きつゝスゴ〳〵と

橋掛りより幕へ入る、此所衣の受渡しと双方へ立ち分かるゝ丈けの事なれ共、双方の擧動思ひ合はざれば、物凄き内に物哀れなる趣きを損ず、僅かの所なれ共前半中の眼目にて注意すべき見所なり、深山幽谷中に物すさまじき地獄の有樣、朦朧たる裡より物哀れなる亡者の出顯、思ひ掛けなく頼まるゝ衣の片袖、事々物すごく不思議なる光景に接しながら、平然と之れを受取りて立ち去る僧は澄したもの此の悠々たる僧の姿と、さめ〴〵と泣き入りながら立ち去る亡者の影は、宛然朦朧たる油繪にて夢幻劇美の精粹ならめ。

シテの幕に入りし後僧と狂言方のセリフあり是れ僧の外ケ濱に來り獵師の家を尋ぬるものにて之れに依りて僧の既に外ケ濱迄來りしことも想像せらる。

ツレ女は、物思ひある風情にてサラリとうたひ出す。

實や本來も定めなき世の習ひぞと……

僧はツレの謠の内より出來りて門に立ち案内を乞ふ。

如何に此屋の内に案内申候……

僧は不思議なる老人より麻衣の袖を頼まれし次第を語つて思ひ合す事ありやと問ひ、女は扨は亡者の浮かみもやらで迷へるかと思ふに付け先立つものは涙ながら殘し置ける衣を取出せば不思議や其の衣と袖は同じものにてあり、愈々弔ひの心も切になり、亡者の請ひに任かせ簑笠を手向け、僧は讀經して厚く其の跡を弔ふ、若し寫實劇を以てして此の場合を演ぜしめなば、妻子は衣にすがりて泣き伏し、所の者は聞傳へて不思議がり、僧は是れを諭して因果を説くなど隨分大騒ぎの一段なるべけれ共、唯僅かに兼て出しある衣の上へ更に持來りし片袖を置く丈けの所作の外何事もなさず、僅かに地謠にて其心持を謠ふのみ、理想を主とする能樂の品位は實に奥床しき事ならずや、此間の謠としてはワキはツレと掛合にて謠ひ進み地へ渡し、地は隙さず受け浮きやかに引立ちて謠ひ「あらなつかしの形見や」とシツポリシヅメ「やがて其まゝ」より氣を換へ伸々ボンヤリと謠ふ。

一聲にて後シテ出づる、痩男の面に黒頭、白鉢卷、のしめ、白水衣、腰帶、腰簑、いかにも獵師の亡靈の體にて杖を突きて出で、舞臺に入り、シツポリと沈みたる調子にて滯らぬ樣に古歌をうたふ。

陸奥の卒都の濱なる呼子鳥……

引立てども麗しきといふにあらず、物思ひたる心にて哀れ氣にうたふ。

一見卒都婆永離三惡道……

地は伸々と引立ちてうたふ、此の所景色をうたふものにてシテの出の謠とは趣きを異にす、唯沈める計りにて陰氣に過ぐるを避け景色を謠はせて樂劇の美を示せる手段なるべし、形も亦之れに適ひて別に意味なし。

所は陸奥の奥に海ある松原の……

亡者の妻を認めたる妻子は聲を掛けなば消え失せんかと思ひ惱みて歎く、氣を掛けてサラリと謠ふ。